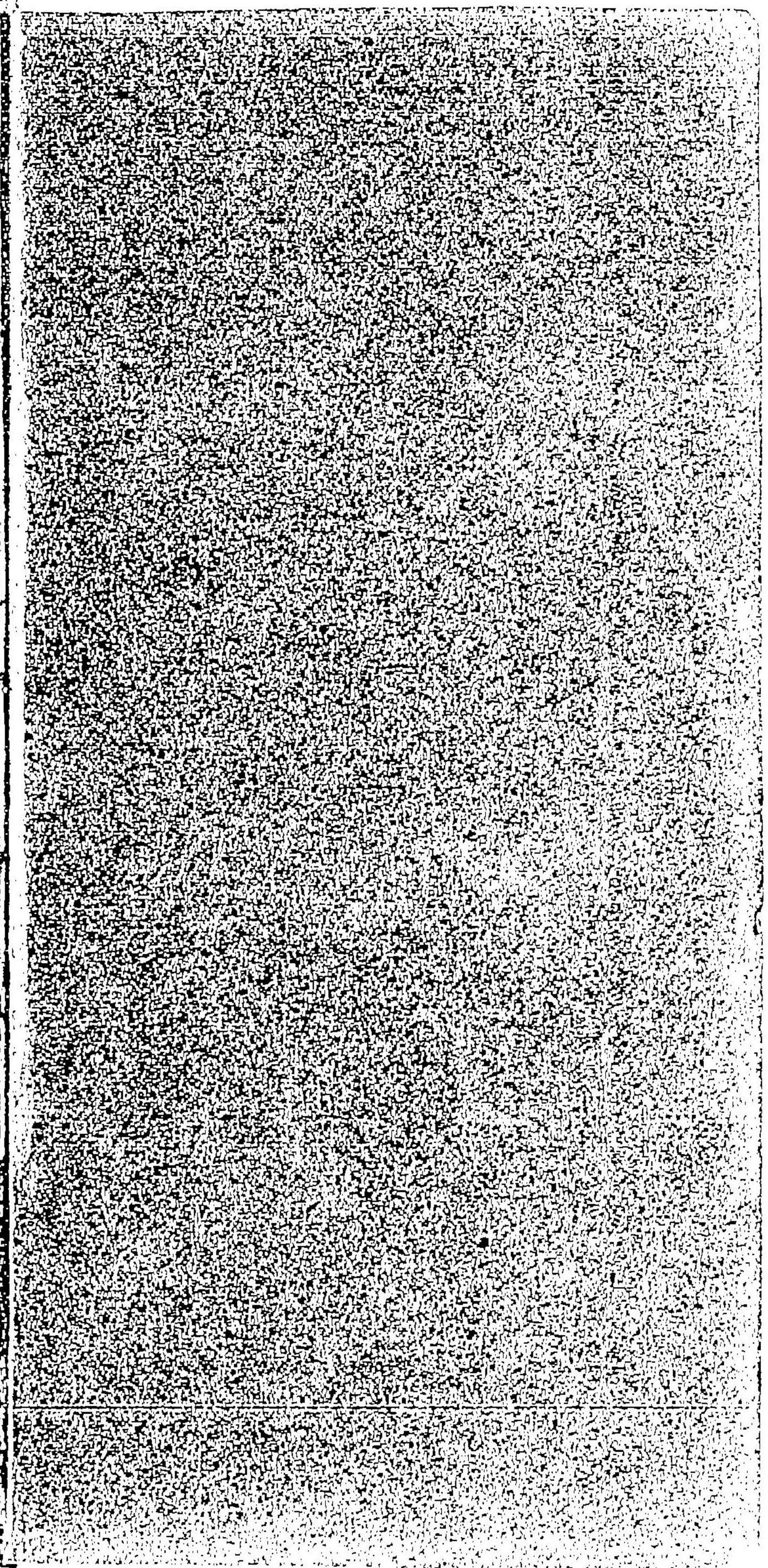
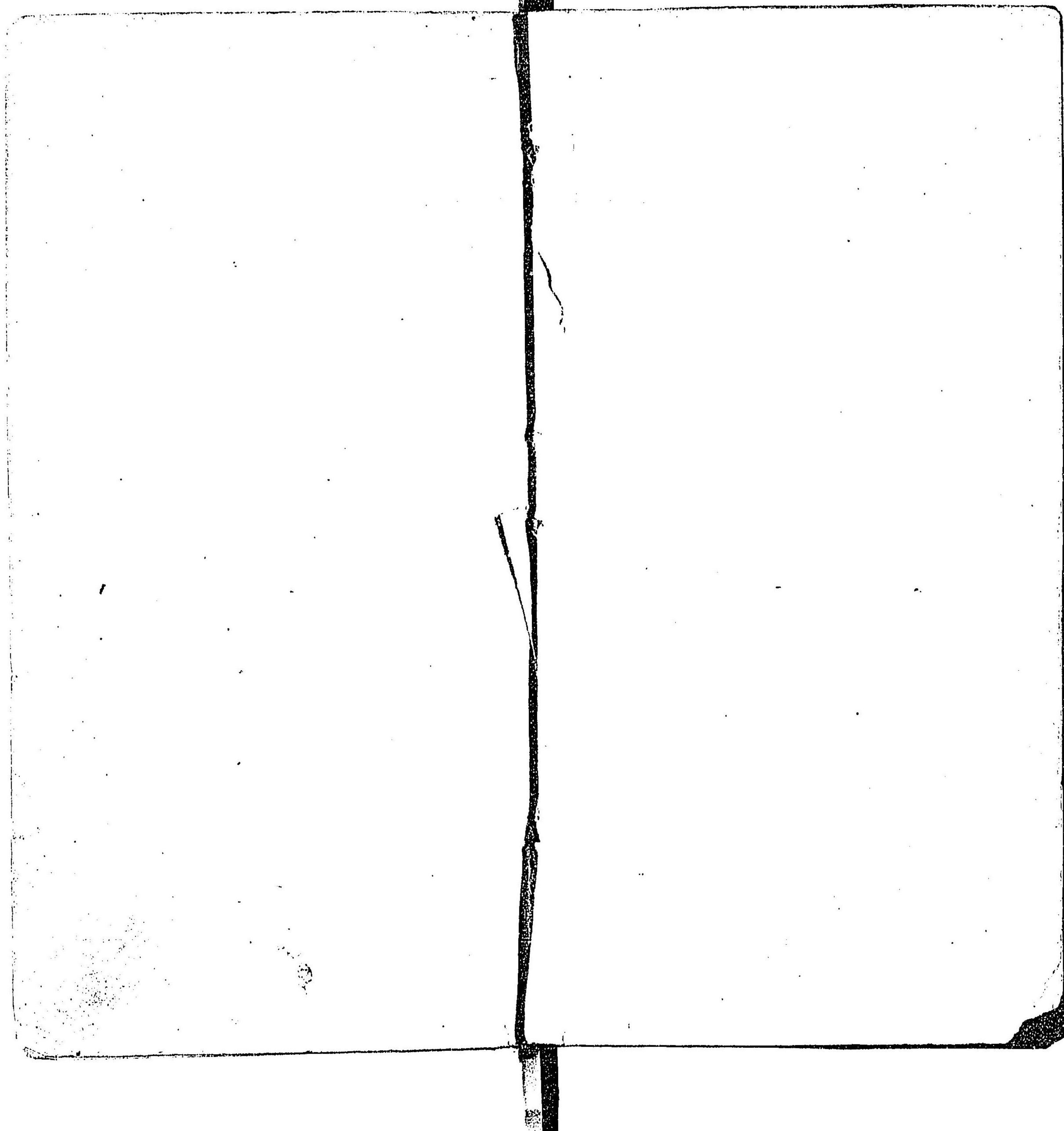




110





332-110

旅
より
旅

へ

吉
江
孤
雁
著

44. 7. 12

自然は、たゞその在りのまゝの姿を、吾々人間の恣な眺めに委かせてゐると思はれる時と、強いコンマンドするやうな力を以て、吾々のライフの中へ無理やり割り入りて來ずには置かないと思はれる時と、それ程強くはなく、只人間と自然とがミソグレルして、一向差別の付かない生活をしてゐると思はれる時とある。

「夏旅」と「山影」と「癡人」及び「松林」まで、大凡三つに分けて見たのは、如上の場合の區別を、おぼろげながら付けて見たいと思つたからであつた。

吾々の主観と對境の自然との間に發する火花が一種藝術の光りとなる。吾々は飽くまで引き締めた心持で、其光りを捉へることが出來たらば、それで好いと思ふ。

癡人

新線人 一六

汽車の響 一五

二瀑布 一五

病 二〇

松林 二七

黒影 三三

泥路 三三

空椅子 三六

砂座 三三

雀 三三

霧 三四

草の實 三五

「セイヌ河畔」 三三

若葉の夜の森 三三

夏旅

三人旅 一

猪苗代湖畔印象記 一

檜原湖 一

岩越の國境 一

信濃河の河口 一

山影

山影 一

花瓶 一

荷花車 一

鐵軌輪 一

かやうな小冊子ではあるが、時は梅雨の六月、獨歩氏の忌月に當るので、これを今迄での此種の二冊の著書と共に、青山なる氏の墓前にさしげ度いと思ふ。

入梅の日、大久保にて

吉江孤雁



旅より旅へ

三人旅

吉江孤雁

時間ま際になつて馳つけける人車の響、忙はしそうに往き來する人の足音、發車時刻の迫つたのを告げる鈴の聲、その中を上野驛の名物、例の稍々さびを帯んだ、幅の廣い、すみくまでも行き亘る聲が、「日暮里田端赤羽大宮、小山宇都宮黒磯白河郡山福島青森行きは出ます」ど呼んで行く、

旅行者の胸に幾多の興味と好奇心とを喚び起す其聲、私は幾度も耳にしたが、黒磯、白川、郡山、これらの方面は初めての旅だ、今さら胸の踊るやうな氣がする。N君は「僕は此停車場からは一寸もさきへ出た事はないですからね」といふ、互に話す調子が思は

すはすみ、目が輝く。

一所に旅する人は、N君と最一人、都合三人だ。

空にはうす黒い雲が幾重も幾重も押えつけるやうにかゝつてゐるが、地平線上遠く、白く輝く雲がもやく湧いて、日の光は灰色雲の上からその先きの方へ洩れて射してゐる。望みありげの空合ひだ。

一面につづく稻田の淺緑、所々に立つてゐる榛の樹林を抱き、その中の農家の戸口にまでも迫つて、目のとく限り只緑一色だ。

荒川の鐵橋を渡る。水上の方は緑の林がもくもく重り合つてゐて、其背景をなしてゐる秩父山嶺や富士の姿も今日は見えない。川は其緑の林の中から出て来るやうだ。

浦和、大宮、これ等の町の背後を取巻いてゐる原野の特色は、平地に生じ得べき、榛の樹、櫟、松、杉などが、ごちやく入り亂れて林をなしてゐる事だ。高原國で見るやうに、松林、杉林、雑木林、が截然としてくぎりをつけて、各その地所を占めてゐる。

るとは非常に趣が違ふ。様々な土壌、様々な木の實をば、川の流れは、断えず山上から高原から運び出して来て、平原の上へ分布し行くのだらう。それが思ひ／＼に芽を出し、生ひ立つて、雑多な混合林を構成したものだらう。武蔵野にはことに此特徴が目につく。

蓮田、久喜、栗橋、古河、利根の鐵橋を渡る頃、厚い雲の裾が裂けて、筑波の山脚がその亂雲の中から一線を表はして来た。

雲が動き出したと思ふと、ぱつと日の光が連緑の上に落ちる。爽かな色だ、その爽かな緑の上を風が渡る。雲の影が明るく暗く、濃淡をなして緑の上を流れる。

遠い地平線の上からは雲が次第に奔騰して、深碧の空がみる／＼傾分を廣げて行く。と、うす鼠色をした雲は消えて、その代りに、雪のやうに白く輝くむく／＼した雲が、その深碧な空色と對して際やかに立つてゐる。

「凄く程美しいなあ」と、N君は思ひ入つたやうに、窓から仰ぎながらいふ。實際凄く

程美しい雲の色だ。

宇都宮、岡本、寶積寺、矢板、野崎、那須野が原は一面櫟の矮林だ。その原の中、汽車が走つて行く頃、空はまた閉ぢて、急雨は廣い廣い原一面にふりそゞぐ。遠くの方は煙つてしまつて、はつきり分らない、ざあつ、ざあつ、といふ雨の音が寂しく聞こえてゐるばかり、だが、西那須野では降り手が多かつた。

黒磯、黒田原、日がぱつと照らし出して雨は明るくふつてゐたが、間もなくやんで、雲も消え、日が輝く。

白河の古城址は停車場に近く見えてゐる。奥羽の咽喉、會津攻めの軍兵は此地でなか／＼の激戦をしたと聞いてゐる。

白河から地勢が一變する。今迄で曠野の中を走つて來た汽車は、これからやうやく山國の趣きを備えた高低多い草原、矮林、眼界を劃する山嶺と、其處の松林、この小さな丘の麓を、回りめぐつてゐる沼地などの間を走り走つて行くのである。

沼には水が銹びて、水草の花が白く小さく咲いてゐる。稍々黄ばんだ、硬ばしい色をした、草とも、矮樹ともつかない藪だ、みが一面に敷つめてゐて、松がとび／＼に立ち、低處低處には淺い水溜がじく／＼してゐる。其水の汀の藪に埋つて小さな草葺きの屋根が幾つか見える。

一體何人が最初斯様な場處に住居を定めたものだらう。随分思ひ切つて寂しい場處を選んだものだ。一家族がそこに家をさめる。また後から他の家族が来る。小さな畑が出来来る。沼の水をひいて田が出来来る。水草が咲き、太藪が伸び、みさごが飛ぶ、沼を中心に様々なロマンスがその近邊に散在してゐるに相違ない。——雨は又一しきり、走つて行く雲の中からふりそゞぐ。

矢吹、須賀川、汽車は郡山へ着いた、雨はまた晴れた。

岩越線に乗換えるには間がある。停車場前で休んでゐると、警官がついて電話で醫者を呼びに來た男がある。廿歳ばかりの細君とは思はれない女を一人つれて同車して

ゐた人だが、警官のかけてゐる電話によると、其男の同行の婦人が、妊娠の氣味であつたのが、汽車で揺られた爲めに、どうも様子が普通でない、直ぐ醫者に來て貰ひたいとの事だ。いかにも心配そうに其男は家の入口の所に悄然たつてゐた。

どういふ關係だらう、兄だらうか、そうらしい、妹が東京へ奉公に出てゐる中に、過ちを仕出かして、それを兄が迎えに行つた歸り途、妹はそれを苦にして病氣を引出したではないか、といふやうな事に皆の考へが一致した。

岩越線の汽車に乗込む。今迄でよりは一層山谷の間に走り入つて行くのだ。汽車は堀の内の驛へ着いた、停車場は左手で線路の方が高く、しば草の土手を五六段降りて出口になつてゐる。

見ると、その停車場の出口へ、今汽車からおりて草の段々を下つて行く者がある。紺色のさめた、所々破れかゝつた風呂敷の大きな包の上へ小兒を一人のせて、その兒の腰をおろす處に雨傘が二本結はえてのせてある。こゝんでおりて行くので、頭は見

えないが、黄に乾らびた足のさきには、塵で白くなつた藁草履をはいてゐる。周囲を子供が二人、各々裾を端折つて小供相當の荷物を背負ひながらおりて行く。出口まで行つたと思ふと、すぐは出ずに、出口の傍の板を腰掛に荷を卸ろした。ほつとしたやうに風呂敷の端を胸で解きながら顔を上げた。老婆だ。細い顔で、眉毛も眼も太い。顔を両手で撫でおろして、車窓から見てゐる人々に目を向た。疲切つたやうな、また來るべき處までは來たが、何處か頼りのないといふやうな風を見せてゐる。荷物の上の小兒をおろすのを見ると、その兒も手に小さな湯湧し土瓶を一つさげてゐる。世帯道具を一切まとめて着たといふ風だ、これから何處へ行くのだらう。

汽車は動きだして次第に湖邊に向つて登つて行く。前の女といひ此老婆といひ妙に深い印象を残した。

汽車は山澗へ着いて、初めて猪苗代湖の風光の一端に接した。

湖畔に二泊。

N君は山瀨から別れて、若松の友人の家へ行く。私等二人はいとだてを着て湖畔めぐり、雨にも逢ひ、船宿にも泊り、湖水を船で渡つたりして見た。

三口目に一まづ若松まで行つて、また引返して来やうといふことで、名倉山の麓から戸ノ口の十六橋を見て、舊街道を通つて會津の平へ出た。

會津の盆地は大體が甲府の盆地に似て、稍々東西に長いだけだ。若松の市はその平の西南に偏した方に寄つて立つてゐる。舊時廿五萬石の城下だ。

市街へ這入る前に飯盛山へ出て、白虎隊の屠腹の場處及び其墳墓を見た。その墓の下で會津戦争に参加した老人に逢ひ、當時の話を聴く。

若松の市へは半里ばかり、白い平な路で歩むに従つてぱつくと砂塵のまひ上る中を通つてはいる。いくら行つても、いくら行つても裏通りばかり歩いてゐるやうな氣がしてゐる中に、舊時の城の大手門になつてゐた高い石垣の片側だけ取残されてある所へ出た。榮町といふのだそうだ。其處から程遠くない清水屋といふ旅館へ泊る事に

した。

早速N君に報知すると、N君はやつて來た。

暑さはなかく、酷い、表は人通りが多いやうだ、氷を削る音なども聞こえて來る。

星が多く空色が濃く、いかにも山國の夏らしい晩だ。旅へ出て四日目で初て、繪葉書に出逢ふ。思ひ切つてどつさり買つて送るべき處へ送つた。

今夜N君は扇子へ「別れの風だよあきらめしやんせ、いつまた逢ふやら逢はぬやら」と書いて呉れた。N君と色々の話をする。そして東京を出たのはもう一ヶ月も前のやうな氣がすると話し合つた。眼前の光景が盡く新らしく、眼から耳からの總ての感覺が際やかなので、何事の印象も明瞭で、それ以前にあつた頭の中の考へも心象も一切、これが爲めに消されてしまふ。——N君は遅くなつて遂に泊ることにした。

翌朝早速舊城址を見に行く事にした。

旅宿から出て真直ぐに廣い道を西につき當ると、その道の兩側に、水草が一面はえ

て、その中に河骨の花が黄色く玉のやうに咲いてゐる深い濠の間には入つて行く。道は折れて曲つて、築き上げて高い、苔むした石垣の角に沿つて中へと導く。石垣には一面の蔦、石垣の上でも下でも、草が長く伸びて、それが打續く旱天で、葉末は黄に枯れかかつてゐる。克く荒廢の跡には生えてゐる、名は知らないが、白いたんぼに似た小さな花が、この中に漂ふやうに咲いてゐる。

これが、正面から攻入れれば横手の櫓から撃ちおろし、曲がればその側面を突き崩すやうに築き建たといふ、天下の名城鶴が城の趾だ。

濠に臨んだ方の石垣の上には古い松や杉の大木が立ち並んで、昔時の姿を見せてゐるが、天主閣の跡などは、石垣こそそのまゝになつてゐるものゝ、建物などは少しも残つてゐず、幾百石となく鹽をつめて置いたといふ天主臺の下は、只廣い大きな穴を穿つてゐるばかりだ。

此天主閣の跡でも、石垣の間でも、平地でも、濠の端でも、何よりも無遠慮に生長

してゐるものは漆の樹だ、さすが會津塗の産地だけに、城内までも漆の樹が多いものと見える。

舊城趾の中で兎も角くも建物といふべきは、草刈共が自分等の使ふ荷車や、作道具を藏つて置くやうな木造の小屋と、本丸の跡に近い邊に茶見世が一軒出来てゐるばかりだ。

草刈は毎日七八人づゝも来て草を刈つてゐる。日蔭で二三人煙草をのみながら話をしてゐる者、腰をかゝめてサツクサツクと鎌を振つて片端から草をなぎ立てゝゐるもの、奥御殿の庭であつたらうと思はれる、飛び石があつたり、庭樹が舊くくねつてゐたりする邊が、草がよく伸び、刈り場には最もよく適してゐる。

南に向つた石垣の上へ出て見た、直ぐ下は濠が深く蘆が茂つてゐる。濠と石垣との間には様々な樹が、樺や榎や槻などの若樹、老樹がごちやく茂つて、濠を隔てゝ向ふには河が一條、河原が高く砂を盛り上げて、走つてゐる。

此石垣の上を傳つて、城趾見物に来た人々の影が一つ二つ向ふに見える。大きな杉の樹の蔭へ来て、草を藉て三人して腰を卸ろした、凝平と、向ふの方で草を刈つてゐる人々の方を見てゐると、蟬が高く樹上で鳴いて、三人のうち何人も口をきらない、暫く凝平としてゐたが、その中に思ひ出るまゝに、別に考へるでもなく、ぼつ／＼話した。話し出すまゝに興が加はる。山や、城趾や、草や木や、總てのものを通じて流れてゐる、大きな情の流れが、音を立てず、各自の胸に湧いて、めぐつて、流れるやうに、話は引入れられて行くやうな、物語めいた、大方回想の事件に向けられてしまふ。

N君は故郷の河と湖の話をした。湖上の戀の話もした。自然の美しさに思はず引入れられて自分の身を捨てやうとした人々の話もし合つた。村の學校友達で情死をしたものゝ話もした。——その話の舞臺が眼の前に開かれてゐるやうで、斷續して話に終りがないうやうだ。

眼を上げて見ると、杉の木立の上に磐梯山の姿が、今日は雲もかゝらずに悠然と立つてゐる。日が直射して、山皺の影が黒く、はつきりと目には入る。明日はあの山の頂を極めるのかと思ふと、胸が踊る。

城趾を出て、暑い砂塵の揚る中を兵營の構への外に沿ふて、真直ぐな路を歩いて行く。その道を何處までも行けば山の中へは入つて東山温泉となるのだが、温泉へは磐梯山を下りてからに仕ようといふので、左へ路を取つて、村のなかへは入つて行く、人家の作りが不思議に、路へは其側面を見せてゐるばかり、一軒として正面に向つてゐるのは無い。農家で何かの都合で左様いふ作りにしたものか、一寸と見當が付かない。街道筋へ出て見ても町家でない以上は皆側面ばかりを見せてゐる。

猪苗代の町へ若松から引返して一泊、磐梯山の陰を廻り、檜原湖を縦断して其翌日は檜原湖畔に一泊した。檜原湖は美しい寂しい湖水であつた。

翌早朝、湖を横断して檜原の本村から米澤街道を傳つて、山中の路に差かゝつた。山はんのき、檜、櫟などの一面厚く茂つた山あひを通つて行くと、蒸し暑く、登りは短いけれどもなかく峻しい、曲りくねつて登る。炭焼の小屋が幾くつか立つてゐて、岩の間からは細い流れがほとばしつて、その先には笹の葉を一枚丸くして、口をつけて吸へるやうにさしてゐる。

話しながら登つて来たのも、餘り峻しくなると、自づから語が絶えて、黙つて、暑さと、渴と、急坂とに抵抗して、一步一步力を籠めて登る。しかし力を入れて登る坂へかゝると初めて旅らしい旅をしてゐるやうな氣がして、勇氣も自然と増すものだ。努力の興味だ。

山の頂には茶屋がある。鯉魚の乾した固いのを煮て呉れる。信飛境の山中の村などへ行くときよく煮て呉れる奴だ。いかにも山中の旅をしてゐるといふ氣がした。會津平が一圓眼下に見える、卅幾日に亘つての早魃だ。下の村では雨乞ひをする、水論が初

まるといふ騒ぎ。右手の方に高く遠く、連嶺の姿がいかにも雄大に見えてゐる飯豊山からかけて、打ちつゞいてゐる幾多の峻峰の頂から中腹に亘つて、うす霧がかゝつてゐるが、只茫乎としてゐるばかり、雲ともならず、雨ともならない、日の光は、からつと晴れ渡つた空から直射する鮮かな色ではなく、何となく、どんよりと暑さうで、いかにもすすつきりした所がないの、そのくせ、日没頃になると、太陽は大きく真紅の色に燃えて、朱紅の雲は山の頂を輝らし、地上の物何一つとして焼盡くさすば止まないといふやうな勢を示出す——これが早魃の時の特徴である。

此峠の茶屋から後は路は下り坂で、大鹽といふ村迄は走り下らずには居られない、四時何分發の喜多方の列車に間に合はうとて、大急ぎに急ぎだす、先きへ行く人の後姿は白い砂塵の中に没して見えなくなる。草鞋の足を引きすつて行つた後からは高く白く一條の砂塵が追掛けて何處までもつゞいて行く。

途中で喜多方までの路を訊くと、或は二里になつたり三里になつたり、不定の道の

りでいかにも心もとない、時間も切迫する。そよ目もふらず、話もせず、只白ほこりの中を通つて行く。旅行には汽車時間は一切禁物だと思ふ。こう苦しくては到底もつづくまいと思ふ時分に喜多方の町が見え出した。三人の一人は、逢ふ人に停車場は停車場はと訊く、それがまた一里さきになつたり、半里先きになつたり、急に十町に縮つたり、癪にさわるやうだ。

喜多方の町を夢中で馳せ抜けて、停車場へ来て見ると、三十分前に發車した後だ、がつかりして、次の發車をまつ爲めに停車場前の茶見世に休む。物を言ふ元氣もない。半分眠りながら食事。

次ぎの汽車で若松へ向ふ。車窓から仰ぐと、磐梯は半ば以上暮雲の中にかくれて見えす、入日は例によつて真紅な光を平野の上に投げてゐる。若松の停車場から温泉へ行く。明日はまたいとだてを着て三人越後路へ向ふ筈。

猪苗代湖畔印象記

上野驛を去る百三十九哩。郡山驛から岩越線へ乗換へる。目的地が次第に近づいて來たのを思ふと、二條の鐵軌の山麓を繞つて次第に奥深く走り込んでゐるのがこと更に目につく。午後二時頃の風は、山の向から此鐵路の上を亘つて吹いて來る。線路の兩側の栗の林が靡き、長く伸びてゐる草の葉が靡く。汽車が喘き喘き登り初めると、山頂を掠めて奥の方からけたましましい鳴き聲を立て、岩燕の一群が黒く舞ひおりて來る。線路に沿ふて流れる一絲の溪流が、我れ先きと争つて、岩を飛び越え、岸に踊つて、囚を脱した逃走者の姿をして落ちて來る。初旅の目的地を胸に描いて居る者は、思はず窓から半身を乗り出して山上を仰いで見すには居られない。車窓からの視線を遮り、汽車の行く手に立ちふさがつてゐる此等の山々は、其頂上

も肩も盡く鋭い角度を刻んでゐる。火山地方の山岳の特色の一つでもあらうか。此鋭い山骨を包んで居るのは、草と低い藪とばかりらしい。樹林の姿は、それらの山の裾を繞つてこんもり茂つてゐる檜や栗の葉の濃緑を漂はせてゐるのに認められるばかりである。

堀の内、安子ヶ島、熱海、山中宿、汽車は次第に兩山の狭い間に走り込んで、レールに沿つて立つ栗林、檜林の緑の枝は手を伸ばせば達しさに思はれる。兩山が一層迫つて中央には隧道を穿ち、隧道を出ると蛇々として黒蛇の走つてゐるやうな姿をして雪除けの覆が長く鐵路の上を包んでゐる。其雪除けの中を騒がしい音を立てて汽車は馳け抜ける。と、山勢が稍々開いて、東の山麓に一叢の柳林があり、その中に人家が見え出して来る。北に向つて同じく細長い一列の柳林、その林の頂をかすめてチラックと水波の日に閃めくのが目には入る。八月眞夏の日の光りも、日没近く、湖を隔てる一帯の緑を照らして、美しくはあるが烈しくはない。涼しい風が北から車

窓に向つて吹く。

猪苗代湖！ 遠くから想ひ望んで来た其湖水だ。海拔一千七百尺の高處に湛えて居る水、周回十六里、磐梯山を仰ぎ翁島を浮べてゐるその水の壯観が、今眼前近くに横つてゐるのかと思ふと、窓に倚つて、踊る胸を押えながら、遠く微白く閃めく水波の美しさを眺め入らずには居られない。汽車は次第に速力を緩めて停車場へは入る。山

瀉く」と驛夫が連呼して通り過ぎた。

車の扉を開けて三人の旅人は此驛で下車した。

二人は洋服に草鞋穿き、一人は靴を穿いて稍々大きな旅行カバンを提げてゐる。此の一人は若松に病友を尋ねて一週間程も滞在しやうといふので、他の二人が湖畔繞りと磐梯登山の行程を同行して来たのであつた。三人は停車場を出て東の山の麓「湖東館」といふ宿を求めて行つた。湖水からの疏水の水がゆるく石橋の下を繞つて流れる。一條の白い砂路が湖水の方から此疏水に沿ふて東南に走る。此砂地を通つて行くと、

落日の名残の光りが東の山一帯を照らして、柳葉の緑が爽に輝く。とその中から鶯の聲が朗かに響き出した。

百日紅の枝が、塚の上からくねり出てゐる門を右に、二階建の大きな建物の表からは入つて案内を乞ふと、三十許の主婦らしい人が現はれた「あの秋元さんの力からの御客様で御座すかのし」。柔しい語調で、俯向き加減に、奥の座敷が東京からの學生で塞がつてゐる、が、まづ暫く此處へと、八畳の間に熊の皮を敷いた上へ案内した。

「湖へ行きませうね早速、」

「え、行つて来ませう。裕衣でも貸すかしら。」

「貸すでせう」

三人はまろやかな裕衣を借て、細紐をしめながら湖水へ出掛けて行つた。

柳並樹の砂路は踏むに心持がよい。夕日は眩しく輝り付けるが暑くはない。風は此度は南から吹く、振返ると黒いレールの向ふを立ち閉いである連山の上に、薄黒い崖

を含んだ入道雲が湧き上つてゐる。

湖面は夕日を受けてキラ／＼輝き渡る。西の空にはもく／＼と白い雲が湧いて、それが遠くなるにつれて次第にうす黒く、最も遠い波の上を壓して眞黒な層雲が厚く長く敷いてゐる。日はその白い雲の頂から、また黒い雲の間から、光線を放射して湖面は青光を照り返してゐる。正面向北に當つて湖の對岸は低く山を見せ、その上に遠く／＼藍青の一峯が微かに浮ぶ。此濃藍の遠い峯くらゐ、かゝる景色に尊さと懐しさとを加へるものはない。一體が明るい景色だ。右手の山際、湖に沿うて路が見えてゐる。疏水の出口には、水力を引いた板挽場が、唯一の物音を此静かな湖上に響かせて、他まで畫趣ある光景を夕日の中に點じてゐる。

三人は砂地の上に長い影をひいて立つてゐた。

「は入つて見ませうか」

「え、」と、思はず誘はれるやうにして、三人は裕衣を砂上にぬぎ捨て、水へは入つ

た。富士の裾野の湖畔を故郷としてゐる一人の外は、二人とも泳ぎを知らない。遊覧でさまで冷たくもない水の中を、胸まで浸せて歩いてゐた。小さな浪が沖の方から寄せて来て胸を繞つて行く。岸の方を見ると、一列の樺の林が濃く茂つて、西へ向つて長く續いてゐる。その林のはづれから、一條の白い路が現れて、峙立てゐる高い山の裾を湖に沿て、うねくと遠く西の方に消て行く。その路を、夕日を浴びて、荷馬車が二臺通つて行くのが目には入る、その馬車へ乗せられて、何處までも何處までも湖のつきる果てまで行つて見たい、行つて見たらば其處に小さな漁村があつて、舊い船宿などがあるに違ひない。——見てゐると、其荷馬車は山の角を向ふへ廻つて見えなくなつてしまつた。

夕日が薄くかざろつて來ると、岸の方から蜻蛉が幾つもの、すういくと水の上へ向つて飛ぶ。南からの風は雨氣を含んで樺の林を吹き破り湖上に廣く渡つて行く。湖はややさわ立つて、水も幾分冷たくなる、三人は水を出た。

南方の黒雲は遂に崩れて雨となつた。大粒な雨は横に樺の林をなぐつて湖水にふりそゞぐ。三人は急いで樺の樹の下へ身をかがめめた。頸をすばめて小鳥のやうに、下枝の繁みを繁みをと求めて身をに入れて、凝つとしてゐると、風は頭上に高くさあつくと鳴つて、その度毎に、雨はざあざあ降りかゝる。「直き止むだらうか」、「止むでしやうよ」と小聲で囁き合つてゐる。湖上はまだ消え残つた日影が縞を織つて、薄い光が雨の中をたゆたつてゐる。ギイツ、ド、と板挽場の音はまだその中に響いてゐる。「思ひ切つて馳け出しましやうか」、三人は樹の下から飛び出したが、南に向ふ路上、風が迎へて雨が吹きつける。耐らなくなつてまた路傍の家の軒へ飛び込んだ。宿から傘を持つて迎ひに來た、が、人の來た頃は雨はやんで寒いまでの風が肌を吹き透して行つた。

旅へ出での第一の夜は話はずむ。まだ疲れない感覺に總ての印象が鮮かたで、車中

の病者、標泊の一族、話題はそれからそれと果てがなく、湖から漁れた鮮魚に楽しい晩餐は賑かに味はれた。

晩餐後また闇の湖を見に出掛けて行つた。空は黒く、風は高く柳の樹樺の樹の頂に鳴つてゐる。闇の中を一寸と立ちとまつて煙草に火を點てゐると、蛙の聲がゆるく耳には入つて来る。がわくといふその聲を耳にしてゐると、遠く旅に來た夜といふよりは、久振で故郷へ歸つて友人でも尋ねて行く夜のやうな心持がする。水際まで出て見た。風は暫く吹きたえて、穏かな波がさぶくと砂上へ爬つて來るばかり、湖上遠くは水だか雲だか山だかわかちなく暗いが、それでもその黒い中に何處となく濃淡のけじめがある。水はかすかにその闇の色を胸に浮べてこつそり忍ぶやうに寄せて來る。暗い静かな湖を前に、目を閉ぢて水際に立つてゐると、自分等の身軀も此まゝ、此黒い暗の中へとけ込んで行つてしまひそうだ。

此時風はまた思出したやうに、後から追掛けて來て、一列の樺林に打當かる。林は

しどろに姿を亂して騒ぐ、その中を風は、無理やり樹々を押し分けて、水上へどつと出たかと思ふと、やがてそのまゝ、音は低く遠くかすかに消えて行つてしまふ。動揺する空氣の働きも、重くるしい闇の力に壓せられて、自づと鈍るものと見える。三人は黙つて水際の砂を踏んで歩いて行つた。

「好い夜だね」静かな晩だ。思つてゐることは多いやうだが、兎弁く黙し勝ちにな。三人は只きれぐに此様なことを言つて見たばかりであつた。宿へ歸つて寢に就く。

頭が澄んではつきりした好い心持だ。うつくしい空氣が頭の中を吹き通して行くやうな氣がする。蚊帳の香りが朝の空氣の中に漂つてゐる。旅の第二日。急いで戸を開けて見た。霧雨が霏々として舞つてゐる。また湖畔へ出て見た。

小雨に煙る水の面は只茫乎としてゐるばかり對崖の山影も見えず物寂しい、磐梯は

勿論その一角をだに現はさないと、積水極みなく、見渡す限り只雲と水とのやうな心細い感じがする。小波は霧の下をくぐり小雨に叩かれながら岸へ寄せて来る。何處とも捉へ所のない此湖上の霧の中を、西の方から岩角を繞りて夢のやうに、白帆が一つ浮び出して来た。白帆は黙つて雨をくぐりくぐり北の方を指して進んで行く。が、じつと見てゐるうちに雨の霧の中へ閉されてしまつた。

今日一日は、旅先きの雨籠で話してもして送るのかと思つてゐたのが、正午頃から急にからつと晴れ上つて、湖畔一帯の山は緑に輝き渡る。何處からか蟬の聲もする、もう擬乎として家に落ちてゐられなくなつた。旅仕度をして湖畔を廻りたい。一人は兎に角若松まで汽車で行かう、二人は別れて、草鞋穿きに絲楯を肩にして、湖の南岸を湖の果てまで行つて見ようといふ事になつた。

女主人の柔しい語で引留めるのも、その艶な姿を最少し研究して見たいといふやうな要求も、思ひ立つた湖畔の旅心にはかなはない。そゝられるやうな心持で、燃え立つ緑の天地の中へ軽く飛び出した。

山潟の停車場へ来て、下り列車を待つてゐた。東西兩側の山、その中間の稻田柳林盡く雨後の日に照らされて目醒むるばかりに美しく、飽まで爽かた。頭の中には一點の暗い影もないやうな氣がする。

プラットホームの上を、かつぶくの好い驛長が一人だけ、づしりくと歩いてゐる。

「驛長には惜しい人品ですね」と若松へ行く一人が囁いた。

「驛長などによく彼様いふ人物を見掛けるものですね、これも旅中忘れえぬ人物の一人かもしれない。」

「そう」と考へ込むやうな調子で答へる。

やがて汽車で来た。

「旅先きの別れですね。」

「は、長い別れた、ちやお大事に」

「有りがたう」

汽車は山瀉の驛を出ると間も無く湖岸の隧道へは入つてしまふ。二人は汽車を見送つて、並木の路を、湖の西方へと心ざした。

北、東の空はくつきり晴れ渡り、湖を隔て、遠く藍青の峯々が横に亘つて、氣高い色を浮べてゐる。磐梯も裾長く太い線をおろして来て、頂にはまた雲が浮んでゐるが、巖然として湖の東岸に迫つてゐる。水の色は昨日に比べて一層濃く、西風が強いので沖遠く波の翻るのが、紺青の頂きを、銀白の厚房で綴つたやうに、その厚房は二重にも三重にも重なり重なつて、後から後から、追掛けく起き上つて来る。その波の中に、舟一つ見えず、今朝見た白帆も何處へか消えてしまつた。

西から南へかけての空には、もや／＼雲がまだ怪しく湧き上つてゐる。此等の雲は時時ちぎれて、蓬々として飛んで来る。脊は日に照されて白く輝き、腹は薄灰色を含んで白蛇の如く、蜥蜴の如く、異形な姿をなして、伸んだり縮んだり、そのまゝの陰影を湖面に寫して過ぎる。

樺林の背後に沿ふた一筋道、いつかその林はつきで、湖面に接して聳え立つ山の下を、湖面とすれ／＼に通つて行く。路の先き先きは、幾曲り曲つて、その奥まつた突き當りの曲り角に、榎柳などのこんもり茂つた森がある。此森の中には社があつて、その社を中心、人家が五六軒づゝ叢がつてゐる。

湖上或處は明るく、或處は暗い、此明暗の影は、波から、水際から水際の森から、山の半腹にも及んで、處々に幅広い縞を織る。此明るみの中へは入つた時、森の緑は一團の碧玉となつて輝き、暗色の下に置かれると、黒い塊となつて湖邊にしがみつくやうになつて見えてゐる。

路は曲り曲つて急峻な崖下を通る。仰ぎ見ると、その峻しい崖の面に、蔓をのばして、葛の廣葉がそよいでゐる。廣葉の陰からチラツ／＼と紅紫の花が覗く。野撫子

の一叢、野花の一群、萩の花、一寸の餘地にも咲き盛つて岩角を飾つてゐる。昨日耳にした緑の中の鶯の聲と、今日仰ぐ岩角の尖端の葛の花と、いかにあわたしい山國湖畔の夏の姿をつくづく思はずには居られない。

向ふからやつて来る人もなく、只時々山の角から、草を刈つて大きな束にしたのを脊負つて、来る男に逢ふばかり、夏の日の岩角から照り反へし、波から照り反すのを受けながら通つて行く旅行者には、一本の煙草にも、稍々單調に倦いた疲勞を忘れさせる力がある。此爽かな大景の前に、岩角に腰をおろし、點火した紙巻の尖端から緩く立ち登る煙を見てゐるのが特殊の興味をひくものだ。

「困つたね君、もう煙草が一本しかなくなつた」と年上の一人が言ひ出した。

「次の村まで行つたら有るでせう」

「あるかしら。」

如何にも惜しさうに一本の煙草を取出して點火した。左手の指の間にはさんで、少

じづ、喫つてゐる。右手で帽子をとつて、臂を膝に、扇子代り扇いでゐる。

「斯様な美しい湖水があるでせうか、」と年少の一人は、手巾で鼻先を拭きながら伶俐さうな眼を上げていふ。

「中禪寺や蘆の湖なんか到底も及ばないね」

「中禪寺は暗らすぎるし、蘆の湖は露骨だし」

「といつて、琵琶湖や叡浦は茫漠としてゐすぎるし」

「實際です、Nさんが此方へ來なかつたのは惜しいですね」

煙草はもう灰が白くなつてしまつた。そのすひ殻を投げ捨て、二人はまた湖邊の岩道を半里ばかり歩いて行つた。

入江が一層奥まつて、その突當りに一條の小流れが山から落ちて來る。その小流の兩側の少し許の地を開いて稻田が出来てゐる。稻田と道との狭い間に人家が甘軒程も並んで、掛茶屋を出してゐる所がある。

「煙草があるかね」と訊くと、「へえ、煙草大鹿なら少しはあるがのし」、「巻煙草は無いのか、困つたな、此先には有るかね」え、船津へ行きや有るがのし、船津、船津は今夜の宿泊所だ、まだ四里の先きた、多少落膽せざるを得ない。が仕方がない、また水際路を歩き出した。

折々の西風、断雲の姿、湖上の波、仰ぎ見ると、磐梯はいつか雲を拂ひのけて、全山の雄姿颯爽として湖に迫り、碧空の下にセビヤ色を輝してゐる。

路の兩側を縁取つて、いたどりが長く伸び、頂きに薄白く穂のやうな形の花をつけてゐる。水に近く月見草が砂地に生えて、下葉下葉は波に咽び、寄する波に一樣に陸に向ひ、引く波にまた水に向ふ。夕月の下に、湖の縁を繞つて咲いてゐる此等の花の連らなるのを眺めたらばと思つた。

日は時とすると飛雲の下に隠れる、と、空の色、天心は紺青に、湖の對岸の低い山々の頂に近く、淡青に輝く。水の色は沖遠く濃藍をたゝえ、湖心は日が雲間から

影を落して赤く、その赤色が流れ流れて幅廣く廣がる。岸に近くは只青い小波をたゝみ、その青い波の上を、岸の方からいたどり月見草の頂を掠めて、紅蜻蛉が群をなしてすういゝ飛んでゐる。

路が草山の下を通ると、不意に一匹の仔馬が草の中から飛び出して來た。路の上へ立つて不思議さうに旅人の姿をじろく見てゐるが、そのまゝのそく登つて行つてしまふ。見ると、今までは氣付かずに居たが、上の方の草の中に、五六匹の馬がザツク／＼草を噛んでゐる。放牧の馬が居るのだな、と思つてゐると、ド、ツと音がして岩角の向ふ側から一群の馬が頭を伸ばし、そろつて驅け出して來た。急いで草の中へ身をかはずと、馬は知らずにづん／＼馳け抜けて行つてしまつた。

草山岩角、入江、森、深淵と人家と草刈の人々と、野馬と二三里の間ついで、やがて路は湖畔を暫し去つて平らかな野原の中を行く。此湖は西南に狭く、東北に開け、その西南の果てが船津の宿になつてゐる。路は東南北の三方は殆んど湖に沿ふ

て通じてゐるのであるが、西岸一帯は断崖が切立つて道も通じない。水の深さも此岸が最も深く、入江もまた細く奥まで切れ込んでゐる。南岸の路は、舊時の打越峠の下を通つて濱路、横澤、館などいふ村を経て、船津へ着く少し手前は路が湖邊を離れるのである。が、此邊まで来ると、もう湖水の果てに近かく、對岸の断崖の面もはつきりと見とめる事が出来る。水上一里位は、空氣がうつくしいので、その断崖の面に生えてゐる松の樹の梢の尖端までも明らかに見とめられる位である。

日が西に傾くと今迄で眞白に湧き上つてゐた行くての山の上の雲が、眞紅に燃え出した。茅蜩の聲も處々に聞こえて来る。小急ぎに行くと處々路普請が初まつてゐる。訊くと「宮様が向岸へおいで」のし、今に自動車でおまはりなさるがねし」とせつせと道を修理してゐる。有栖川宮家の別邸は、湖口に近い北岸の丘陵の上に立つてゐて、七月中旬から、常は寂しいその丘陵の上が賑かになる。夜は電燈も輝く、湖を繞る幾多の小村の住民は此一點の光りを湖の中心とも命とも思つてゐるのだ。それ

から暫くたつと湖沿の白砂路に宮家の自動車の轟が聞こえて来る。その響を耳にする、村民の胸には活力が湧く。船津には此自動車の止り場處が定まつてゐるとの事だ。九月初旬、湖上に波が騒立つて、磐梯の頂に雲がちぎれて飛ぶ頃、自動車の姿はまた湖畔を去つて、丘の上の電燈も消えてしまふ——湖畔の住民は長い冬の間をまた来る夏を期待してゐるのだ。

眞紅に燃ゆる夕雲の下、松林の山の麓に沿て、人家の立ち並んでゐる村が見えて来た、船津の宿は此れだ。湖は宿場の北四五町の處まで追つて來てゐる。山ならしが厚く葉を茂らし、その樹の下を小流れが、北へと急ぐ。夕雲は反照が強く、此厚い緑葉を透して、家々の軒端から奥まで照らし込む。只一家きりしかない四辻の角の旅舎に草鞋をぬぐことにした。

夏の夜は暗く、船津の山上に燃えてゐた雲も消えて、湖畔に立つてゐるたまの樹樺

の樹の古木に風がどつと鳴つてゐる。が、波は立たない。湖の西南のはて、細長く兩岸が狭まつて、前夜山瀉にて見た茫漠の景色とはいたく趣きが違ふ。水も深く凄く久しく岸に立つてゐる氣になれない。たまの木の下に明るく火光が見えて、小家が一軒立つてゐる。からつと戸口の障子が開たかと思と、一人の女が出て来て、何か水際で洗ひはじめた。その傍に舟が二艘砂上に引揚げてあつて、木材が澤山水に浮んでゐる。女が物を洗ふ毎にギラツツと水が光る。凝つと立つて其手許を見てゐると、小さな水波がその周圍に起つて、次第に大きく、先きの方は茫つとして闇の中へ消て行く。木材の上へ腰を卸ろして、波上をすかして見ると、東北の方に星かと思はれる三點の火光が浮ぶ。星にしては水に近く、波とすれ〜に見える。その中の一點の火は少し高く丘の中腹に浮ぶ。

「あの向の火は何かね」と、物を洗つてゐる女に訊くと、女は一寸と手をやめて、頭をあげて、

「あれかなし、あれや、宮様がなし来て居なはるでなし」

「あゝそうか、近く見えるものだね、此處から何程位あるだらう」

「四里位かなし」女は頭を下げてまた洗物に意を入れてしまふ。

三點の火光！ 廣い暗い湖上に他に何も目に入るものもない。夜天は黒く星が所々に覗いてゐるばかり、勿論磐梯の姿も見えず、今日通つて来た湖沿ひの路も闇に閉されて見えない。黒い水がひし〜と陸に向てせめよせるやうで、長く立つてゐられない。たまの木の下のそこそ肩をすばめて歸つて来た。

終夜山ならしの葉が軒にかさこそなつてゐた。湖へと急ぐ水の流の音、馬の嘶き聲、荷車の響き、遅くなつてからも山から草を刈つて歸る者、漁師の話し聲などが聞こえてゐた。取集めては旅の感じを十分味はしめる。

翌朝早く對岸長濱まで小舟を雇ふて渡ることにした。「南なら好いが、雲が怪しい、風が西にならなければ好いが」

といふのを無理にも頼んで、出る事にした。

舟夫は髯むしやの巖丈な老爺だ。「お爺さん風は大丈夫だらうね」といつても、「ムム」とばかり取りつくすべもない挨拶をしてゐる。「まあ出て見ねえ事にや」との話だ。草鞋は穿いて、絲楯は巻いて宿を出た。「一生に二度と斯様な場處に来さうもないね」「そうですね、好く見ておきましようよ」、年少の一人は、若い眼を上げて小さな驛場を忘れじとやうに見廻はした。舊時は、會津からの荷物は湖上を渡つて此船津へ来たものだそうだ。船津は陸路を繞つて福良、赤津、原などを経て若松に達する事も出来るが、船路を對岸へ渡つて戸口から會津へはいる大路もある。今は鐵路が通じて、此水陸の兩路とも交通は稀で、湖上に浮ぶ船といつてはわざわざ雇ふ渡船か、でなければ僅かな漁舟の外には、**會津若松**神學のボートと、**宮殿**下の美しいヨットが浮ぶに過ぎないのである。船津は、黒ずんだ、荒廢の様を見せてゐる軒並びの人家と、何處の家にも嘶き聲の聞こえてゐる馬の多い驛場である。

老舟夫は砂上から船を滑らせて水に浮ばせる。崖を敷いて二人は洞の間へ腰をおろした。「爺さん何時頃長濱へ着けるね」、「まあ十一時位んかのし、いつて見ねえ事にや」また同じ語を繰り返す。棹を砂地へ立て、肩でギイーと押すと、船はゆらくと浮び出した。

たまの木を隔て、西岸の入江が斷崖の下へ追つてゐる。其上の山の頂から大きな雲が不思議な姿を見せてゐるが、南から東へかけて空は晴れ渡り、朝日はくつきりと對岸の赤ちやけた斷崖を照つける、その斷崖の下は波の色が紺碧で、如何も深さうだ。指して行く長濱——淡緑の森の繁茂してゐる丘陵の下、水上四五里先きまで略それと指摘する事が出来る。

水路は天候次第さまで急ぐ必要もない。なるべく陸路の通じてゐない西岸に接して斷崖の景色を眺めながら漕いで行くように頼んだ。中の澤鬼の間などいふ入江入江の小名が老舟夫の口から切れぐに話される。舟は岩角に稍々近く入江を奥深く覗き込

んで通つて行く。入江の兩岸は、赭岩が峙立つて、日に向ふ一面は烈しく反照し、日に反く方は暗く、波また暗い。その赭岩の面をよく見ると一縷の途があるともなく通じてゐる。入江の奥のつき當りには、昨日見たやうな森がこんもり茂つてゐる。「あの森がやはり神社か」と訊けば、舟神様だと答へる。所々の入江の岸に二二三軒つゝ人家が見えて、小兒が小さな舟を出して浮べてゐる所もある。入江の中に小島の點在してゐる所もある。山の背後から入江づたひ、湖の岸までも出て来て、此様な寂しい所に居を定めてゐる人もあるのだ。——秋、木の葉が西岸から此の入江の中に散り込んで、磐梯の峰に雪が積り、南に向ふ渡鳥が暫し湖上に悲い聲を響かせてゐるが、やがて岸から氷り初め、崖の面に垂氷が出来、細徑が断ち切れ、此の小フールドが盡く氷切つて、裏の山にも雪が深くなる頃、前面に連なる此一大水鏡を望んで見たらば、如何ばかり慣れてゐる目にも寂しい事だらうと、四季の終りに此湖邊の寂しい住民の生活を思ひやらずには居られなかつた。

湖上半里程も浮び出た。昨日の湖沿ひの白い岩角の路も目に見えて、船津の岸のたまたまの木はまだはつきりしてゐるが、正北にあたつて、淡青の丘陵の上、八月空の澄み切つた天際に、真白く雪を頂いて、半腹以下は標渺たる紫紺の色に輝く、一連の遠嶺が見えだして来た。如何にも氣高い眺めだ。思はず遠く仰ぎ見すには居られない。

「船頭さん、あれは何て山だね」

「あれかね、あれは飯豊山だね、あらたかな岳でねし」

「彼處へでも行く人があるかね」

「あるともな、一度あのお山へ行って来ねえちや、男で無えつてなし」船夫は、切れくに飯豊山の尊嚴を説いて聞かせる。岩代と羽前と越後の國境に亘つてゐる此飯豊山の連峰は、會津平は勿論米澤の方からも福島からも越後路からも遠く仰がれるので、此岳の見える限りの國々の男兒で、男となる前に、一度は是非登山しなければならぬ。此舊習があるのださうだ。十五六の少年は皆白衣の結束、白の鉢巻をして、先達に連れ

られて山に登る。それも日中は險路に目の眩するのを恐れて、却つて夜中鎖につながらつて登る。一度び此山頂に立つてそのあらかたかな山氣を浴びて歸つて來れば、初めて一人前の男として幅がきくのなさうだ。

風は、幸に、断えず南から波を送る。横なぐれの西風が來ないので、舟の進路が早い。今迄頂から麓まで、全く雲に包れてゐた磐梯が、中腹を雲間から現はして來た。

「船頭さん、磐梯には何時も雲がかつてゐるのかね」「そうでも無えが、まあ大抵雲深いな」——仰いで全景を見たい。二日後にはあの頂に立て、湖上を見おろすの

かと思ふと、胸が踊る。なる可く語らじとする船頭を強ひて、ぼつ／＼磐梯破裂の話を出そうとする。明治廿一年の夏、朝の事だ、恐ろしい音がして、家から振り飛ばされるやうにして出て見ると、湖の向ふに山の上から大蛇のやうな黒雲が四十丈も真直に立ち上る。と思ふと暫くして灰が降つて來る、湖を越えて船津の町まで降つて來る。そら山抜けたといつて大騒ぎをしたが、それでも灰だけで、別に船津附近は大し

た損害はなかつたとの事だ。

不安な歴史は長い年代を置いて繰り返される。火山の麓の住民は、悪童に追ひ散らされる蟻のやうに、悪戯の手が暫しゆるむとまた直ちに其巢に寄り集つて來る。磐梯の破裂は只に廿餘年前ばかりでない、往古太同年間に、磐梯は一度破裂して、その際爆裂した土砂は麓の河流の行く先きを止めて、今の猪苗代湖を作つたのださうだ。此の湖の下には、その上月輪更科の二郷と十二村の沃土があつたのださうだ。小船の通つて行く深淵の下、三十丈の深さの所には、晴朗風なき日は、波を透して眞白な石の鳥居を見とめる事も出來るとの事だ。

「岩代磐梯山は寶のお山俺に黄金がなりさがる、老船頭は唄の文句だけは纏かに教へて呉たが、所謂會津節なるものは、「いゝや駄目だ」といつて唄つては聞かせなかつた。二回の大爆發の爲めに前には猪苗代の一大湖を作り、後には秋元、檜原、小野川の三大湖を作り、幾百の生靈を埋めた暴君も、今では「寶のお山」といつて讚嘆の辭をたゝ

えられてゐる。磐城の海上幾里の外まで乗り出して、遠く天際に磐梯の山を仰ぐ所へ来ると、初めて、漁獵が網を破るくらゐあるとの事だ。その時、磐城の舟夫共は、漁船の舷を叩いて「笹に黄金がなりさがる」と唄ふのださうだ。

南風につれて雲が昨日と同じく蓬々としてちぎれ飛ぶ。昨日は岸に立つて見たのが今は頭上を掠めて過ぐる。雲が目を遮ると、波は黒くなり、ばつと雲を破つて出ると、波頭に黄金の珠を連ねる、出發より二時間程経過して湖の中心にゐる。追ひ風ではあるが波はなかく高い。向岸も遠く、東の岸も猶遠く、ぎらく直射する日の強さに、幾度手拭をしぼつても頭が熱する。うしろ波に揺れる小舟の動搖で胸は多少苦しくなる。まだ二時間程は、水を見るばかりと聞いては、稍々まち遠しい感じもする。此湖水には二間以上もある大龜の居るといふ船頭の話、それを船津の舟夫等が捉へたが酒を飲ませて放したといふ話。或は會津戦争に船津の宿では馬を徴發され、ひどい目に逢つたといふやふな話を聞いたが、それにも飽いて二人は舟の中へ仰臥して

空を飛ぶ雲を見てゐた。

「もう直き長濱だのし」と老水夫の聲がする。二人はひよっくり頭をあげて見た。鮮かな色彩の緑の丘が眼前に近く、その下の砂地に波がまるんでゐる。目醒めるばかりに鮮かな景色だ。「翁島は」と訊くと、少しく左手の方を指して教へる。島の上には團々として淡緑や濃藍やの青葉若葉が球のやうにかたまり合ひ、その縁を繞つて青蘆が一面に叢生してゐる。島と岸の出鼻との間に、水は幾條にか分れてめぐりめぐつてゐる。飯豊山の雄姿は此眼前の景色に隠れてしまつた。

長濱へ着いた。振返ると、青い波がしき立ちしき立ち、白い頭を昂げて砂地に押し寄せる。日がざら／＼とつてりつけて、眩ひがしきさうだ。砂地から左手の丘へ登る。草の縁が濃く、路は白く、登るに従つて湖の大観が次第に一陣に收められる。湖を縁取つて緑葉がこんもり茂つてゐる。其緑葉の上を白雲がまるばるやうにして湖の上まで漲つて来る。雪白な其雲、あくまで深碧な水の色、日は上から直射すれども暑くはない。

澄んだ光線は空中に瀾漫して、如何なる微細なる草の葉の先きからでも、水際の小砂からでも、波の飛沫からでも、旅人の帽の眉廂からでも、其光を反射させずには置かないのである。丘の一角へ出で、緑の草を藉いて、二人は湖に眺め入つた。目を睜り、耳を立て、胸は自らと前へ張り、飽までも此美しい眺めを五體の中へ吸ひ入れずには居られない。

今日は珍らしくも磐梯はその全景を示して、東北の空に悠然たる姿を見せてゐる。默せる如き此雄峯は、その沈黙の間に偉大な仕事をしつゝあるのだ。刻々に何事かを計つて、何事かに力を伸ばしつゝあるのだ。心を澄して氣を鎮めて、凝乎とその雄姿を見詰めてゐると、山から森から、雲から、海から、一つの微妙な響が全體に亘つて鳴つてゐるやうな氣がする。鮮明な景色の下を冷たい暗流の流れてゐるのを覺える。眼前の美觀も一つのアバリシヨンではないかとやうに思はれて来る。

路は廣く青葉の中をめぐつて、湖の入江を時々瞰下しながら過ぎる。翁島は全島樹林の島だ。水は島全體を包み、林の中にくいり入り、出口の方へ方へと攻め寄せて来る。名倉山に沿ふて翁澤に下ると、それから戸口の十六橋、湖の水は此橋下をくぐつて、其山の間を抜け、阿賀川となつて遙々越後の海へ落ちて行くのである。

橋の畔に小さな茶屋がある。

家の背後は、軒近くまで水がひたひた迫つて来て、青蘆が叢生し、眞白に浮藻の花が点在してゐる。少し先を、山の突角や島の一端が立こめて、水路が判明しない、水は縦横自在に流れめぐつて溢れてゐる。その蘆の中を馬をおよがせてゐる人がある。家の前の路を山袴を穿いて、馬をひいて二三人づつ通つて行く。馬の背には木の枝を二ヶ處ついでつた細長い束ねをつけて行く。

橋を渡ると、路は松葉と茅原との間からまた少しづつ登つて、松林を透かして湖光の閃めくのを見る。「奥越拔涉」と菅笠に書きつけた二人の年若い旅人が、後ろから來

て、追ひぬいて草鞋で白い砂塵を立てながら急いで行く。路が次第に登るにつれて曠野の景色となる。磐梯の裾野につづく曠野の一角を道は走つてゐるのであらう。湖水はもう遠くなつて、振り返ると松林の頂き越してチラ〜と水の閃めくのが認めらるゝだけである。

磐梯は今日は終日其雄姿を示してゐた。頂上から劃して来る太い外廓線が裾野の中に没する末は、草が長くのび、矮林が續き、藪たゝみが續く。其中に夜泣石といふのがあるといふので、先行の二人連の菅笠はその草の中を分けて草刈に尋ねてゐる。二人もその跡からついて行つた。夏草の中を探るて、小さな野石が立つてゐる。其面には「夜泣石」と刻りつけてある。子供が夜泣きする時に此石に願を掛けるとそれが泣き已むとの事だ「なんだつまら無い、もつと何とかいはれの有る石かと思つたに」と言ひながら先行の二人は、草鞋の紐をしめ直して、づん〜先きへ立つて行つてしまふ。廣い裾野の中に一面草刈りが馬を追つて來てゐる。ザック〜鎌を振ふ音も聞こえ

てゐる。其草の中に縦横に道が通じてゐる。馬が放れて馳け出して行くのも見える。野の中に道標の石が見え出して來た、若松までもう二里は無いらしい。

迂廻して行く廣い新道の間々を縫つて幾條の捷い小徑がある。野から松林、林から小村、坂へ出て登り降りると、遠く一望の會津盆地が眼前に展開せられた。稻田人家樹林の配置の細かな先きを、一帶の連嶺が巒々として亘つてゐる。その右手の奥の方に湖上で遙かに仰いだ飯豊山の連峯が厳しく見えてゐる。あの連嶺の向ふがもう越後の國かと思ふと何となく三日後に踏んで行く旅の先き〜が想見される。

坂の向ふ側へ下ると、會津街道の舊道に逢ひ、また坂を登る、敷石道に草が深く、牛が喘ぎ喘いで降りて來る。その坂の頂に碑が立つてゐて「無名戦士十八名之墓」としてある。八重葎が蔓を伸ばし葉を廣ろげ、ひる顔が一面に花をつけてゐる。此邊から一帶會津戦争の舊戰場だと見える。坂の兩側は古木の松の林で蔽はれて、蟬の聲が喧しい。今日一日は初めて夏旅の思ひがあつた。

若松の市街の見えるやうになつてから、左手に飯盛山に登つて、白虎隊の屠腹の跡を見た。東京から孫を連れて来た老人が、連りに舊時の回想を語つて、白虎隊戦時の話をした。此老人は當時一本松に轉戦して捕虜になり、東京へ護送せられたのだとの事だ——飯盛山から下りて若松の市に入る。昨日分れた一人に旅舎で逢ひ、水を嚙んで暑い夏の夜を語り更した。

舊城址からまた飯盛山、午日の日をあびて若松の市を歩き廻つた。砂塵が歩くにつれて舞ひ上る。湖上は殆んど毎日雨を降らす、此會津一帯の盆地は月に亘つて雨が降らない。市中の者は、今日もまた東南の山上を仰いで雨を望むが、雨氣は遂に山上にたゆたふばかり、一粒の雨すら此仰望する人々の上に恵まれないのである。

磐梯の全體を包んで暑そうな霧がかかる。太早のしるしは此霧にも知る事が出来るので、同じ一の山でも湖上で仰ぐと、會津盆地にて仰ぐとはその光景に非常に相異がある。明日は兎に角此山の絶頂に立たうといふので、午後の汽車で再び猪苗代の町

まで引かへす事にした。

太早の折にのみ見られる真紅の火のやうな太陽の光が、西の方一帯の連山に注ぎかかる。其光りは、白ぼく灰のやうに厚い砂塵の路を照らして、その上を行く人馬でも荷車でも盡く此砂塵をあびないものはない。

汽車の窓まで砂塵がふりかゝつて来る。落光のまぶしさが車窓に亂射する。猪苗代へ向つて走る汽車は、平地から次第に高原へと登るので、高原には松の林が多く秋草の咲き亂れてゐる廣い眺めがつづく。雪除けの覆ひはうるさいまでについでゐる。雪除けを出ると、磐梯の姿は今日の最後の光を受けて紅く、峯の一角は鋭い傾斜をなして、白ぼい砂の崩落する長い層が見えてゐる。三人は他かす此山峯の雄姿に眺め入つた。昨日の老人は偶然車中に乗り合はせた。また山を指して噴火當時の慘事を何かと語つて聞かせた。

汽車が次第に登るにつれて、西の方松林草原の連なる果てに、チラッ〜と湖光が見え出して来た。故人にめぐり合ふ悦びだ。日はまだ沈み果てないが、光は高く放射して山頂に餘光を止むるばかり、湖上はもう暗く。波は濃い紫をたえて熨すやうに静かだ。船津は、長濱は、山瀨は、と思つても見分けられない、只暗い水の光りを眺め入つて、遠く思を寄するより仕方ない。汽車は堀切りの中へは入つて、兩側は草土手に遮られ、湖光はまた見えなくなる。廣田、大寺、翁島、汽車はやがて猪苗代へ着いた。町までは一里ばかりの真直な路、停車場で最一度振返へると、湖上は暗く重い眠りに入らうとして、一波起らず、冷たい夜の幕はもう、遠い遠い對岸から水上にかゝつて来た。

夕方の冷たさ、山國は露のおくこと早く、肩から胸からしつとり夜氣をおぼえた。村の白壁の家がまた暮残つてくつきり目には入る。小急ぎにして行く人々の後から同じく足を早めて猪苗代の町へは入つて行つた。磐梯の山は直ぐ左手に近く聳えて夕雲

が峯にかゝつて来た。此山に近く龜ヶ城址が立つてゐる。會津戦争には此處にも多少の小せりあひがあつたのだ。

山驛の夜は冷たい、伊勢屋といふ旅舎の二階に宿つて、裏の窓を開けて見ると、星影が山頂近く鋭い光を放つてゐる。夜雲はかゝつたり消えたり、その毎に尖つた岩角が雲の間に隠見して山は一層近く見える。カン〜と夜遅まで村鍛冶の刃物を打つ響が澄んでひびき渡る。

登山の案内を宿に頼むと「宇南山源三郎」といふ五十許の老爺を呼んで来て呉れた。此老爺は噴火當時からの山の事には詳しく、年に幾回となく登山するので、山一切の事は掌中を指すやうに話す。噴火の時は此町は全體灰の中に埋没してしまつたのだ。

山案内を歸してから戶外へ出て見た。星影は一層光りを増して、山は眞黒く上から此山驛壓してゐる。夜氣は冷たく懐に流れ入つて、明日の天氣の快晴なのが占はれる。

檜原湖

磐梯陰めぐりをするのに、川上温泉のある直ぐ裏の笹山の急な坂を登つて、第一に目には入るのは秋元湖だ。もと秋元の村のあつた處が、土砂と岩石とに埋められて、その上に水が湛えて湖水になつたのださうだ。せんが、岩といつて、見上げてても頂きのおぼつかない位の巨岩、其尖端に鴛が毎年巢をつくつて、雛鳥が多くゐるといふので、下から銃を持つて覗つても、なかくその頂きまでは弾丸が達しなかつたといふ位の大きな岩山が、殆んど全體土砂に埋まつて、纔かに頂が赭く禿げたやうになつて見える。それが秋元湖の南端を劃して水を包んでゐるのだ。

川上温泉を出たのが日盛りの頃、案内の老夫は、皆なの荷を取集め、さしこに入れて脊負つて先立つて行く。道といふものは殆んどない。水の流れ落ちて来る谿谷の狭い間を、石を踏で登つて行くと、脊中からは日が容赦なく照りつける。汗がじり／＼

出て額から眼には入る。少し登つて小高い所へ出る。下の方を見ると、今出て来た温泉宿が黒く地にひらみつくやうに焼山の間に覚えてゐる。

秋元の湖がちかつと光つて、向うの山合ひに水の一端を見せてゐる。此湖は猶山奥深く二里も先きまで入り込んでゐると、案内者は教えて呉れた。

また暑い石原をざく／＼踏んで登ると、山うつきの質があくどいまでに黄に赤に染つて、其處此處の藪一面に茂つてゐる。赤土焼石の一帶におしだして来たのが、幾つかの山となり谿となつて下の方へ遠く走つてゐる。樹蔭といつては少しもない。石に砂に光が反射して暑い事は言ひやうもないが、それでも何處からか冷たい風が折々吹いて来る。

何處にか水の流れの音がする。焼たれた死骸のやうな山にもさすがに水が湧いて流れるものと見える。石と石との中をくいつて来るその水を求めて息をついた。

また登りだす、と此度は秋元湖よりは少し左手の山合に水が見えだした。これが小

人が落し、何人が鳴らす音といふ事もない、ほろ／＼と初めは少しづつ、何處で鳴るとも分らず音をたてゝゐるが、その中に稍々調子が高くさあ——と音がして、砂煙が擧る、初めて音のありかゝ分るが、それがすむとまた、ほろ／＼と小さな音になる。一定のリズムがあるやうだ。此方の砂山の上へ来て、凝乎とその音に耳を傾けてゐると何とも頼りのない響が胸にしみ亘る。自分も何となく石を落して見たいやうな氣になつて、足もとの黒い岩を動かすと、かざ／＼揺いで、立つてゐる所も危く、ごとん／＼と落ちだすと、それにつれ、幾多の小さな石が後を追つて、みる／＼谷底へ向つて落ちて行く、かざ／＼と大きな音がして、岩の突端に打當つて幾つかに砕け、後はがざ／＼がざ／＼と小刻の音を立て、後は見えなくなつた。

石壁を仰ぎながら徑は次第に奥深くなつて行く、上の方からほうい／＼と聲をかけながら殆んど逆落しのみちをおりて来る者がある、二三十人隊をなして、飛び出したのを止める足場がないので、何處までも落ちて行く處まで行けといふやうな勢でや

つて来る。皆同じやうな仕度をした若者共だ、すれ違ひさま癖を掛ける暇もなく下の方へ馳せて見えなくなつてしまつた。案内者に訊くと、猪苗代の町で明日は天神の祭禮なので、山越えに此山蔭の若者が出掛けて行くのださうだ。

石壁の奥が深くなればなるに従つて、左右から取り圍まれたやうで一層暑くなつたやうな氣がする。水はもう絶えてしまつて、此爆發口附近二里位は一水も口に入れるものがない。でも、此邊のざ／＼してゐる焼砂の上に、下の方と同じく山うつぎの實が黄に紅に色が濃く染つて一面こんもり茂つてゐる。

見ると、ざ／＼をしてゐる赤い石崖の中腹から、湯氣が白く噴騰してゐる。二丈三丈にも高くなるぼつて、勢はなかく猛烈だ。岩あらば岩を飛ばし、砂あらば砂を吹き上げずにはゐないやうだ。それが一ヶ所か二ヶ所ではない。下の方でも、尙一層高く、断崖の天邊に近い方でも、一抹雲のやうになつて、ふつと立ちのぼつてゐるのが目には入る。

櫛の峯の頂からかけて、大磐梯の絶頂、剣を並らべたやうな岩の群の上を少し高く、まが／＼しい黒づんだ灰色の雲が湧き上つてゐる。が、その剣のやうな岩窟の頂へは、雲の下の方から日光が亂射するの、岩角は明るく照つてゐる。

案内者は先きへ行つてしまふので、後方からあえぎながら小石の上を渡つて行く、大きな石の一面かたまつて落ちてゐる出端の所へ腰を卸して、後から來るのを待つてゐた。そして、下の方を指して、其處が噴火口の池だといふ。見ると、眞紅な血のやうな水が小波を刻んで、岩山の間一面に湛えてゐる。その池の上の方は平かになつて、白ちやけた銀鼠色の細かな砂が一面に敷きつめて、その中を血紅色の小川が幾條か分流し、端の方は黄色く縞になつてゐる、日がざら／＼上から照らし付け、濃厚の色彩に目が暗くなりさうだ。硫氣がぶんと強く鼻を襲ふ。向うの岩角の間からは、いかにも物にでも激したやうな調子で噴氣が白く音を立て、湧き上る。案内者はまた先に立つてざく／＼と石の中をおり、白い銀砂の上を踏んで行く。そ

の姿が何だか不思議に思はれて、暫くおりののを躊躇して見てゐると、砂の上に足跡をつけて通つて行く、幾條もの川を越えて平氣で向うの岩によちのぼる。急いで後を追つて砂の上へおりて見ると、細かく固く、指先で掘ると暑い。幾丈の下まで此砂が暑く積んでゐる事だらう、その砂の下には、やはり熱湯の流れてゐるのではあるまらうか。

砂の上から向う側の岩角、湯氣の噴き出てゐる穴を覗いて見ると、周圍の岩は硫黄で染つて、岩の下からは何處といふこともなく、どうといふ音がして一面に吹き上げる。今にも傍の岩が吹き飛ばされさうで、長くはとまつてゐられない。爆發口の中央、絶壁の下に一軒の小屋が見えてゐる。これを附近では噴火口の湯といつてゐるさうだ。飛ばされ、投げられ、追はれ、殺されたにも懲りすまに、少し勢が静まると人は直ぐ寄つて來て家を立てるのだ。

また一面固まつてゐる大きな岩の間を、やうやく足場を求め求めて登る。二三町も

登つたかと思ふと、初め第一に仰ぎ見た石壁が、空へ突き出たやうに遙かに後方に見えてゐる。もうその下からは一里以上も歩んだらうか、今歩いてゐる岩角の出はづれは、爆發口の西端になつてゐる處だ。

徑が少し下りかゝつて、上を仰いで見ると、大磐梯へ登る岩の中頃に人家が見える。それは上の湯といつて、温泉の湧出する所。それから少し下の方にまた一軒家が見える。これもまた中の湯といつて、同じく湯の出る處だ。

右手の下の方を見おろすと、もう脚の下に近く幾多の入江をなした、細長い湖水が目に入つて来る、幾多の島がその上に點在してゐる。これが檜原の湖水だ。これからその岸へ出て、縦に船で渡つて行かうとする檜原湖がそれだ。もう秋元、小野川の二湖は遠い山の陰にかくれて見えなくなつた。

爆發口を出抜けると、後は路は下りになつてち茅の中を行く。水の音が何處かできろくしてゐるが一向見當がつかない。また山うつぎの實の滿地に敷きつめてゐる上

を踏んで行く。渴いて耐らないので、うつぎの藪を押分けて、水音のしてゐる方へはいると、身長よりも高い藪の中、その根元を洗つて冷たい水が流れてゐる。何年にも日の目を見た事のない藪の中だ。かき分けると、さつと日の光が射し込んで水はまぶしやうに、ちよろ／＼藪の下へかくれてしまふかと思ふやうなのをすくつて飲む、川をなしてはゐずに、鍔だ／＼の下一面に小石の間をくりくりいつて流れるのだ。その流れの上、日の目もさ／＼す暗い中に、外面と同じやうに黄に紅にうつぎの球がづらなつてゐる。

藪の中の徑を小急ぎに下つて行くと、かさつと音がして先きに飛んで行くものがあつて行つては、小さな兎だ、枯草色をした一匹の兎が、小徑を二三十間も先きまで馳けちは何處へかかくれて了つた。磐梯の兎といへば、爆發以前は群をなしてゐたものだ。そう、今ではそれが殆んど居なくなつたとの事である。

川上の湯を出てからもう四里位は来たろう、白樺の林に徑には入つて、それから經が森といふ大樹林の中を行く、椽の樹、山毛樹、山榛樹の二抱も三抱もある大樹がきほひ立つてゐる。爆發當時此一山の大樹林だけが慘害を蒙らなかつたものださうだ。土地の人は、弘法大師が磐梯に登られた時、此森の中に經を埋められたその功德で、一木一草も損害を受けなかつたといひ傳えてゐる。

森の中の徑は急なうへに殆ど垂直をなして、底の底までおりて行く。おりてもおりても高い樹の頂が足の下に見える。水音が何處かで聞えてゐるが、なかく達しない、それでも次第に樹間が明るくなつて、傾斜が稍々寛漫になつたと思ふと、やがて、やや幅の廣い美しい水の流れへ出た。

案内者は其處に待つてゐた。椽原湖はもう直ぐ其處だと云つて、煙草を燻らしてゐる。

徑は草原へ出て、白い穂の出たやうな花の咲く鳥の足といふ草が、うす紫の野菊に

似た大輪の花をつけただすま、桔梗や女郎花の咲いてゐる草山の中腹を横手に通つて行く。見ると、椽原湖は直ぐ脚の下まで廻つて来て、經が森の直ぐ下に深碧を湛えて深く山の中まで入り込んでゐる。向うの水際には砂山、赤土の山が、凸凹をなして立つてゐる。あまり不意に湖面に對して立つたので不思議な感じがする。森の下のあたりには、二抱へも三抱えもある白く骨のやうになつた立ち枯れの樹が、何本となく、よきによきと水面に出てゐる。水が漲りあふれて頂上まで没しやうとするのを、纔かに手をあげて、救ひの來るのをいつまでもまつてゐるやうだ。

不圖この時ザツク／＼と草を噛む音がする、立ち止まつて見ると、徑の上の方の草山の頂に近く、馬が一群、長い頸を伸ばして餘念なく草を喰つてゐる。ローイと下から大きな聲で呼び掛けると、大きな眼をあいしてじつと視線だけは此方へ向けるが、噛んでゐる口は草から放さず、ザツク／＼ついでてゐる。

ヒーンと高く嘶く聲がする。樹間からすかして見ると、水面の草と藪のとだえた空

地にまた一群のものが水を飲んでゐる。いづれも毛色が美しく、若々しい元氣で鬣と尾とを振つてゐる。水が澄んでゐるので馬群の姿も浮んで見える。徑の兩側は草がいかにも克く、好ましい位に成長してゐる。鳥のあしといふ草は馬を畜ふに最も好いださうだ。

徑のゆく手に木柵が結つてあつて、通行の人は其木柵の太い木をはづして通り、あとはまた舊のまゝにはめて置く。此木柵は、峯に攀ち谷に下り、湖水の岸に及んで、長城のやうになつて、馬群の牧場以外に駈け出すのを防ぐのださうだ。

牧場を抜けると、横手に通つて来た山が一丈たえて、碧の湖邊へ下る。向うの杉木林の山の麓に沿つて稍々小高い所に二三軒茅葺の大きな家が目には入る。これが長峯といつて、檜原湖の渡船を出す處だ。

もう日影が傾いて来た。渡船の繋いである水際へ来て立つてゐると、經が森の大樹林の上へぬつと、大磐梯の岩の頂が表はれて、その中腹からの赤い絶壁には白い湯氣

の霧の如く渦まいて登るのが見える。楡が峯の頂も、三角頂をなして崖の上からのぞいてゐる。下から斜めに照りつける日の光、今日の最後の一線が大磐梯の岩角を滑つて、爆發口の中まで射してゐる。もやく／＼してゐた空の色も、夕方近くなるにつれて澄んで次第に淡青の色となる。向う岸の砂山赤土の山、湖上に散つてゐる幾つかの島、じつとして波が動かないので、皆その静かな中に影をひたしてゐる。

遠く東方の正面に當つて、紺青の色を浮べて、墨繪のやうに見える連山は吾妻山の一帶ださうだ。楡が峯からおろして来る山脚の長い線は、その墨繪の山の前を劃して、直ちに湖の突鼻となつて水に沈み、その前には岩窟に松や白樺の立つてゐる幾つかの島が浮いてゐる。

黙つて立つて、只静かな湖の面から仰いで磐梯の姿を見てゐるばかり、言語の出しようもない。繋いである舟の底に波がひた／＼忍びよるが、それも此静けさを破るには足らない。心持のよい静けさ。後もさきも無い、只眼の前の光景の中に心は溶け

入つてしまふ。

舟の仕度をする迄といふので、呼ばれて上の方の家へ行つた。今日は此長峯の村の祭禮で、一年寄りの者は酒をのんでゐるし、若い者は嫌やがつて行かねえし」といふので、なか／＼渡しを頼む船頭が無いさうだ。が、無理にも頼んで今日は是非檜原の村まで渡りたいものだ、湖上はたとへ暮れても關はないといふので、どうにかかうにかして若者を二人雇つて、舟へ乗り込むことにした。

乗りては三人、船頭は前後に二人、もう半時間も早えとのし、明るいうちへ檜原さへ行けたんだがねし」といひながら、櫓を押し初めた。舟が動くとき水は流れたす、船頭は兄弟で船首の方の兄で、兵士に出て戦争へも行つて来たといふので、色々な話をしたす。半分以上會津言葉で解つたやうな解らないやうなのを、問ひ続け、話し続ける。

舟が進むにつれて、岬が幾つとも眼の前に表はれる、島がまたいくつとなく兩

岸に沿つて浮ぶ、鷺が二羽、島の傍の岩の上にとまつて、何か考へるやうに頸を曲げてゐる。

日は次第に暮れかゝつて、磐梯の頂きには白いもや／＼した幾丈とも高さの知れない入道雲が湧き立つてゐる。それから續いて、廣い断崖の上には灰色の雲が層をなしてたゞなわつてゐる。全山が麓から頂まで、焼山の荒れ果てた色を見せてゐる中に、經ヶ森の一山だけが、湖上に向つて眞黒く臨んでゐる。水の果ては遠く／＼、六里のさき、細く長く兩岸の山の間には伸びてゐるので、いかに早くとも三時間は水上に費やさなければならぬ。

「わしなんか毎日見てゐても別に見飽きもしねえ山だ、初めての方なら驚きなさるはのし」といひながら、兄の船頭は、様々な事を話し出す。

磐梯爆發の慘狀、今、船で出て来た長峯の村などでは、十七軒あつた家が全部土砂の中に埋没せられてしまつて、その上に此湖の水がひたしてゐる。その中で、他國へ

出て、親の意見にも従はず、飛びまわつてゐた者だけ三人が生命が助かつて、その者共が今では村を作つてゐるとの事だ。一體わし等、此處の者ぢやねえで、盤城の者がのし、此湖では何人も魚捕るよう知んねえだでのし、盤城から此處へ移つて來んでね。」と、話して聞かせた。此湖にゐる魚は、岩魚、ぼや、鮎、鯉、鯰などだが、此湖の鮎はまるく、棒のやうな形をしてゐるとのことだ。鯉の鮎などは舊時檜原村の住家の池の中に畜はれてゐたのが、村が没して湖が出來て、今ではその大きな水溜りの中に自由に泳いでゐるのださうだ。

左岸の、杉の森がとだえて、草原の中に入江の切れ込んだ岸に二軒家が立つてゐるのが見える。以前細野といふ村のあつた見當だといつて、形ばかりでもその跡をとめる爲めに立てられてゐるのださうだ。舊時は七軒あつたのが、死骸もあがらず、その中に住人が家と共に湖底に没してしまつて、一人も助からない。只一人此村へ嫁いで來た女で、何か家内紛騒で里方へ行つてゐた者が命ひろいをした。それが此村の戸

籍上残つた只一人だったので、ともかくも、一家の跡、一村の跡を立てる爲めに此岸へ家を作つて村中の人の形見をとめてゐるのだ、すると、只一家でも寂しからうといふので、他所からの來り者がその傍へ家を建て、今では二軒が一村を造つてゐる。

舊時伊達正宗が米澤口から攻め込んで來た時、此磐梯陰に陣を敷いた。その陣屋の跡は小高森といつて、今は半ば以上水に没した杉林の大きな森である。その對岸にも、出張つた林が水に臨んで、水路が稍々狭くなつたやうな氣がする。——その林の中、うす霧のかゝつてゐる中に、然が朗かな音を立て、鳴いてゐる。水に響き兩岸に應えて、澄んだ音色は夕方の空氣の中に十分の波動を與へ、末は長く遠く消えて行く。

森の上から遠く東、吾妻山の姿は暮雲の底に沈みかゝり、東南の空はからつと晴れて、うす青く澄んだ下に、高野山といふ山が二つ肩を並らべて見えてゐる。正南の方磐梯には薄雲がかゝつて來た。白い湯氣も朦朧してはつきり見え分なくなつた。舟の通つて來た方を見返ると、水の色が近くうす紅く、遠くは紺青に紫を帯びて、

兩岸の突角の間に長くひいて磐梯の直ぐ下まで及んでゐるやうに見える。前途の水路は蒼黒い色、森の出鼻を繞り、茅の茂つてゐる島の間を通ると、鳴が向う岸に一行に並んで浮いてゐる。左岸の雑木の丸い大きな林の中からは、茅蜩がもう今日の最後だとやうに聲を惜まず鳴き立て、寂しい湖上に唯一つの物の音を響かせてゐる。

東の岸が稍々平かに開いて樺林が低く續いてゐる向うに煙が二條三條あがる、何かと訊くと、猪苗代の方から来て開墾地を作つてゐる人々の村だと教える。その村のあゝる邊から檜原湖の水は一葦の水路を作つて、小野川湖の方へ續いてゐるのである。此東岸にはまだ早稻澤といふ村が出来てゐる。

夕焼の最後の光をこゝに集めたやうな、一團の大きな紅の雲が、東岸の林の上に高く浮んでゐる。今迄はさうとも気が付かなかつたが、その下へ舟が來ると、ぱつと湖上が急に明るくなつて、互の顔も紅くなるやうな気がする。雲は上になる程美しく紅く燃えて、下は薄く鼠色にぼけてゐる。最う此雲の色が消えたがさい後、今日の日は暮

れ果て、しまう、今日といふ日の名残を集めた色だ。

船頭は急に櫓に力を入れてギョ〜と漕ぎだした、中々舟脚は早い、手を入れて見ると、逆しまに流れる水は川のやうだ、手に掬んでその水を飲んだ。

櫓の手は烈しく動くが、話し聲は絶えない。兄の方は釘だらけの赤い兵隊靴を穿いて、襦袢一枚、節くれ立つた兩腕に力を入れて、グイ〜と漕ぐ。眼の細い、頬骨の稍々出た丸顔で、齒は白い、漕ぎながら話す。弟の方は頬かぶりをして横向きに押し

てゐる。

早稻澤村では、十七になる娘の兒が他所から頼まれて來てゐて、最二三日農事の手傳ひといふ所で、嫌になつて家へ逃げ歸つた。それを最少したといふので無理につれて來ると、その翌朝が磐梯の破裂、畑へ桑摘みに出てゐる所を後方から黒煙と共に大石土砂が追掛けて、頭からぶつかぶせる、娘は脚を石に挟まれて動くに動かれず悲鳴を擧げてゐると、その聲を聞いた若者等が五六人駈け寄つて、石を取り除けてやらう

としてゐる暇に、第二回の熱砂が、それ等の人々全部の上から引くるめて包んでしまつた。もかく暇もなく焼けて死ぬ。そのうち、川が塗絶される水はついて来る。熱砂に焼かれ水に包まれ、土砂と共に水底に沈んで何處がどうやら少しも分らない。今舟の通つてゐる邊が、其人々の死骸の埋まつてゐる處かも知れないといつて聞かせた。もう薄霧が次第に行くてにかゝつて、すこぶる心もとない景色になつて来る。また三分の二位しか来ないとの事だ。次第に白く立ち枯れた大木の姿が兩岸に近くうす暗の中に見えだして来た。此邊は湖水の最も深い所で、三十尋位あるとのことだ。此邊までが山からの泥土がおし出して来た所で、それから先きは水が溢れて平地を浸したのだそう。従つて舊時の大樹林は皆その水中に没せられ、行くに従つて増々立ち枯れの白骨のやうな木が多くなつて来る。冬は此湖上一帯氷が張りつめて、その上に八尺以上も雪の積る事があるそう。以上

間の中に穴澤の淵といふ處を通る。此處は磐梯陰を固めてゐた會津藩の郷士で、穴澤といふ槍一筋の家柄の士が、暇ある毎に魚を釣りに来てゐた池の跡で、或晩その池の岸にある小屋に寝てゐると、乳母だといつて、尋ねて来て捕つた魚を無暗に食べる女がある、怪しんで遂にそれを切り殺すと、果して大きな老猫であつた。——それから後程經て穴澤は、妻を連れて磐梯の湯へ出掛けて行くと、山の中で大風が吹き起り、妻はそれに浚はれて行方知れずになつた、が見ると、大きな橡の樹の頂にその片袖が引かゝつてゐる。登るにも高くて登られない、困じて居ると、その時竹伐りに来てゐた老翁が、自分が登つて取つてやらうといふ、それを頼むと、頂上まで行つたが、手が届かない、腰のものを借せといふ、短い方をやると太刀を借せといふ、太刀は武士の魂だといつて拒むと、急に其老翁は怪猫の姿に變つて、「我が妻を奪つた恨を、汝の妻に思ひ知れ」といつて、一陣の風を起して、片袖諸共猫の姿は消えてしまつたとのことだ。今でも穴澤の末が檜原には居る。猫魔嶽といつて、磐梯に並んで遠くから仰がれる大山は即ち此猫魔の住居ださうな。今でも穴澤が登れば猫魔嶽は荒れると

言ひ傳へてゐる。

もう四顧しても、山も森も黒い中に没し、仰いでも伏しても磐梯の影も見えない。四邊は水が微明るく銀色に光るばかり、ギイー／＼櫓聲が静かな水面と霧の中にひいて行く。

と、向うの黒い山の下に一點の火が見える、また湖上半里位はあるが、あれが、目指して行く金山の松本といふ家だと船頭はいふ、暫く行くと、左手の入江が廣くは入つて、一湖をなしてゐるやうなその先に火光が點々として五つ六つ浮んで見える。それが檜原の本村だそうなの。

湖水の果てが近くなると、白い立ち枯れの木は一層多くなる。舊時米澤口と磐梯の陰めぐりの路との岐路に立つてゐた追分の松は、すつかり水が浸つて、皮は剥げ、葉は落ち、枝ばかりが助けなさうに水面に出てゐる。此松の立つてゐた所は小高い丘の上だつたそうなの。して見ると、水深の幾許であるかは一寸と計られない。天氣の好

い日の日中、水の平な時、湖上へ漕ぎ出して見ると、水中に沈んでゐる大木、深谿に生じたまゝの姿、或は家屋の一端が大石に壓せられたまゝで見える事があるそうなの。其家の中には永久に囚はれてゐる白骨が、幾つかからみ合ひもつれ合つて、苦しい形相をしたまゝで沈んでゐるのだ。

舟が岸近くへ寄ると、さすがに湖水でも波が岸を打つ、その時、岸の方ではがやく／＼人聲がして、大勢寄つてゐるやうだと思つてゐると、ゆらく／＼と一艘の舟が動き出した。何處へ行くのかと訊くと、今夜は檜原の本村に村芝居があるので、村の若い者が皆此舟で芝居見に行くのだとの事だ。今まで山と岩と谿と林と水と、人氣の絶えた處ばかり通つて来た身には、妙に人が懐しい。自分等も其舟へ乗つて、芝居見物に連れて行つて貰ひたくなつた。

がやく／＼がやく／＼いつてゐたのが少し舟が出ると、唄聲が舟の中から聞こえて来る。若い男、若い女、白地を着たものや、頬かぶりをしたものや、唄はその中から起つて

來るのだ。

舟が着くと、急いで石原へ飛びおりる。もう湖上は闇が閉して水の光もない。此闇に追はれるやうにして、水際を離れると、一條の街道があつて、それを横切ると大きな家が一軒立つてゐる。これが此街道での旅宿だそうだと。街道は右へ行けば檜原峠を越えて米澤へ達するのだ。

宿は大きな暗い、克く田舎で見る農家のやうな作りだが、旅宿本業なので間敷も多い。その最も奥まつた一室へ導かれた。がつしりとした建物、寺院へでも泊るやうな気がする。後ろの戸を開けて見ると、直ぐ大きな林の山が聳え立つてゐる。

明るく火の燃えてゐる爐と、勝手元近い所に据風呂があつて、それへ入れられた。風呂の中から頸を出して見ると、爐の上の火棚が出来てゐて、燻つたその火棚には附木の箱、鮓の束、粉の袋などがごたごたのつてゐる。その下で白髪のお婆と、中年の主婦らしい人とが火箸をいぢりながら顔に火光を受けて話をしてゐる。なんだが

故郷の家へかへつたやうな気がして伸々する、思はず湯が長くなつてしまつた。

明日の朝、日の光を浴びる湖の景色を想ひながら眠についた。

岩越の國境

白い砂塵のあがる峠路を三人で辿つて行つた。

岩代から越後へ越えるといふので、日盛り少し過ぎを、岩代の寶坂といふ村から出て、峠へ登り初めた。

空は曇つてゐるのでもなく、晴れきりもせず、いかにも暑苦しい、太早のつゝいた折にのみ能く見るもや／＼したうすい雲が、山の上から空を包んで、上から蒸しつける。日の光は茫としてゐて、遠くははつきり見えない、それでゐて雨の降りそうな様子もない。

捷徑らしい草の中の小路を見付けては入つて行つた。路ばたには流の音もしてゐるが、草いさねがしてなかく苦しい。三人の一人は胸が悪くなつたといひだした。顔の色を青くして路傍へよつて頭を下げてゐる、先さへ行けといつて、二人を遠のけてお

思ふだけ苦んだか、後からひよろ／＼しながら登つて來た。草みちからまた本道へ出た。

砂塵の路を登り登つて行くと、頂に休茶屋が一軒ある。黒い舊い家で、何人も居ない。聲を掛けると中から十三四になる女の兒が一人出て來た。

苦んだ一人は、その家へは入ると直ぐいとだてを敷いて、顔へ帽子を載せ、仰けに寝てしまつた。女の兒は愕いたやうな顔をして目を見張つたが、別に尋ねやうともしない、爐の上にかゝつてゐる黒い煤だらけの鐵瓶から湯をさして、赤さびたやうな茶を三つ汲んでだした。が、そのまゝ腰をおろし兩足を前へ突き出し、手をその膝の上へ載せて、ぽかんとして此方を見てゐる。

寝てゐる人の頭の上には、煤けた眞黒い棚が釣つてあつて、その棚の上には緋の束にしたもの、焼麩を幾つか括つたもの、雜薬を入れた大きな袋などがぶら垂げてゐる。家の中はがらんとして、奥の方で、何人かひそ／＼話してゐる聲はするが、見えない。

女の兒も黙つて足を投げ出したまゝで動かさぬし、寝てゐる人も凝乎としてゐる。見ると、路を隔て、小高い草の丘の中腹に栗の樹が一本立つてゐる。その下に牛が一つ繫いでゐる。蛇が来て刺すと、のろつと頸を曲げる、蛇はまひ立つ。すると唾をうな眼をして、眼睫を開けたり閉ぢたりしてゐる。

「何をしてゐるんだえ、牛は一口じうあゝやつてゐるのか」と訊くと、「ウム」といつて女の兒は首肯いて見せた。

その草の丘の、牛の居る處から程近く、一本の太い四角な木標が立つてゐる。見ると、それが岩越の國境を劃する木標だ。新潟縣廳へ何里、若松の市へ何里と書き付けである。

此木標の立つてゐる下の廣い路、此路の上を右へ行けば新潟へ、左へ行けば若松へもどるのだ。私は何だか不思議なやうな氣がして、路の上へ出て見た。すると、白路の上を、四角な箱見たやうな物を幾つか重ねて、重々うな荷を脊負つて前へ曲みな

がら、のつそく越後の方から登つて來る者がある。白つぽい空と、同じく白い路との間に挟まれた一點の黒い人影だ。見てゐるうちにその人影は登つて來て、家の中へは入つて、上り段の上へ、「どつこいしよ」といひながら荷をおろした。駄菓子か麴などを入れてあると思はれるその荷物は、ギイツといつて脊負つてゐる紐がゆるむ。荷脊負は手拭で汗をふいてゐる。

路の左の方、連山の重り重つてゐる上に抜き出て、三角菱體を二つ重ねたやうな岩山が天際に見えてゐる。灰色が、つた白い雲がその岩山と連山との間に横に長く引いてゐる。

「あの山は何か」と訊くと、「磐梯山」と口の中で消えるやうに女の兒が報える。

あれが磐梯の山だ。三日前に三人して山陰をめぐつたのはあの山だ。あの山の向ふの裾が猪苗代の湖水に當つてゐるのだ。山の中腹を繞つてゐる雲は、おそらく湖水から騰る水蒸氣の凝つたのだらう。あの山の向ふから登つて、裏へおり、その裾野の會津平を

横断して、今此峠の頂から眺めてゐる。此處を下ること一步、もう此山の頂は世界から隠れてしまうのだ。

越後から登るものも岩代から来たものも、一度は立ち止まつて此磐梯の雄姿を仰がないものはないであらう。「會津萬代山は寶のお山、笹に黄金がなりさがる」といふ歌は、丁度此峠の頂には反對の、磐城の海上から雲煙の中に仰ぎ見て、鯉魚取り船の船頭がうたつた歌だそうだが、此山を取りまく幾十里の、平原、道路、山上、海上から仰いで向ふ目標となるのは、この「會津の萬代山」だ。國境の果てに到るまで明らかに自分の存在を示してゐるのだ。

蒸しかへすやうな暑さも、日が傾くと次第に減じて来る。寝てゐた一人も、顔から帽子をとつて起き返つた。顔の色も幾分回復した。まだ泊るべき津川までは三里許ある。仕度をして、いよいよだてを着て三人してまた出掛けた。

木標を去る一步でもう越後の國だ。地勢が盡く北へ向つて走つてゐるやうな氣がす

る、峠の中腹に鳥井といふ村がある。これはもう新潟縣東蒲原郡だ。

向ふから赤い紙のびらをさげ、大きな太鼓を前へ垂り、笛を吹き、手拍子を打ちながら、兵士まがひの服装をしたもの、揃ひの浴衣に豆絞の三尺を結びさげたもの、その他小兒が五六人集つて囃し立て、来る。今夜村芝居があるといふので、その寄せの樂隊だ。前に休んだ寶坂の茶屋に旅役者の一群が泊り込んでゐて、村の中に小屋掛が出来てゐた。その旅役者の樂隊だ。國境を越えて越後まで夜芝居の客を集めに來たのだ。ドン、ドンといふ樂隊の太鼓の音は次第に峠の上の方へ消えて行つてしまふ。鳥井の村を出抜けると、山あひの路に沿つて、大豆畑、玉蜀黍畑が出来てゐて、葉の蔭からうす紫の大豆の花が見えてゐる。玉蜀黍の穂はすがれかゝり、廣い葉がひるがへる、涼しくなつた風が畑の上を吹いて行つた。

路を挟んで谿から峰へ煙がはひ上る。断えたと思ふと、また一團下からまひ上る、その煙の間を焼けた木の根を斧で叩き切り、大鍬で土をおしてゐるものがある、やき

畑を拓いてゐるのだ——いかに人も人里遠い所へ来たやうな氣がする、路は其中を走つて、北へ北へとおりて行く。

信濃河の河口

越後は海の國といふよりはまづ平原の國であつた。津川から阿賀の川の峡谷を下つて、朝霧が山狭をこめ、河流を包んで、行くてのわからない中から四反五反ぐらゐの白帆を擧げた曳船が二艘三艘とのぼつてくるのを見ながら、流して行く船は一時間五六里位の勢であつた。

阿賀の川の峡谷はいかにも峡谷らしい特質を備えてゐる谷であつた。水量は多いし、流れは急だし、それに此水流とこの流の岸を傳つて下流の方へ急いでゐる細い途との外には、家を建て畑を切り開くだけの空地もなく、聳え立つ山と水と、霧はその山峰から下つて水面を立ちこめて、四邊は茫つとなつてしまふ。海面まで續いてゐる一條の水路を傳つて、海氣は直ちに此の山峡の奥深くまで迷ひ入つて来たものと思はれない。

津川から小石取まで此峡谷を下つて、川船はそれから下流へは行かないことになつてゐる。

小石取の村からは直ぐ阿賀川を渡つて稻田の廣い眺めのなかの平な路を行くのである。

廣い平い平野の國だ。振り返つて見れば、岩越の境を圍む山嶺が、ぎざぎざの形をして、山國と平野とを劃る際立つた輪劃線をなしてゐるばかり、所々に森影は見え、西だと思はれる方に當つて、かすかに山影が浮んでゐるばかり、一ついさゝの稻田、その中に不思議な形をした石油の堀ぬき井戸の棹が立つてゐる。

新潟の町を包む小丘の上でも、平地でも、稻田の間でも、此小ピラミッド形の細長い石油井戸の棹を見ない事はない。

山とは全然絶縁された國、平地は自由に大きな翼を擴げて、大海を抱かんとて迫り寄つて行くやうな氣がする。

新潟から新潟までの汽車は、山を出て平野の自由の空氣を吸つた者を運んで、洋洋たる信濃川の河口から、北海の岸へ送り出すのだ。

新潟へ汽車の着いたのは夕日が華かな光を北海の波に輝かせて、信濃川の河口は紫色の濤をたぐえ、その一つ一つの波の頭に此黄金の色を反射させてゐる頃であつた。汽車を出て直ぐ四百八十間の長い信濃川の橋を渡る。渡つて初めて新潟の市街へは入つて行くのだ。

河口からつゞいた大海の上、淡青の空は爽かな白ぼい夕の色を漂はせて、信天翁の飛んでゐる沖の方から、白帆が行列になつて河口へは入つて来る。河の水は流れるでもない。海岸まで兩岸に沿つて青い蘆が叢生してゐる。その青い蘆の葉に光が反射して青玉のやうに輝く。爽かさは一層まして来る。波の中に、河口に近く島が一つ浮てゐる。全島蘆に包まれて、八月中旬ではあるが、冷たい許りの風が海から吹くと、其島の蘆は一樣に水上に向つて靡く。

橋から左手、水上の方を見ると、右岸に煙突が幾本か立つて、盛んに煙を吐いてゐる。石油製造所だそうなの。その先の方に煙にかすれて彌彦山の姿が淡青の空の下に墨繪のやうに浮んで見える。

水上は遠く空の果て、彌彦山の彼方から河は繞つて出て來たのだ。橋の上に立つて見る限りでは、水は動いてゐるとは思はれない。八町に亘る川中は、水が一面に満ち満ちて、ひた／＼ひた／＼岸に溢れ、蘆の葉をひたし、青い冷たい夕の光を反射させてゐるばかりだ。何か大きなものゝ眠つて居る姿だ。もう河としては爲すだけの事をなし果て、來べき所までは來てしまひ、荒れ狂ふ姿を棄て、如何にも大様に、ゆつたりとした風を見せてゐる。

これが山狭の間に怒號し狂喚し、萬雷の響を立て、馳せ狂ふ犀川の水の果てだらうか。百里以上も遠い信濃の山奥、山と山の立ち籠めてゐる日本アルプスの中腹から湧き出して、岩をくぐり、谿をめぐつて、高原に狭谷を作り、岩窟を破砕し、競ひ求めて

走つてゐる梓川の水の果てだらうか。

私は橋の上立つて暫しの間考へて見ずには居られなかつた。

自分の家の軒先きを流れ、村の中を繞り繞つて、榛樹の飛び／＼に生えてゐる堤の下を、北へ北へと日夜走り流れて行く小川の果ては越後の海だと常々教えられてゐた。雨が烈しく降れば、屋根の水木々の葉を傳ふ水が、皆な落ちて流れて小さな堰をなし、此小川へ流れ込むのであつた。八月の下旬には毎年のやうに大風が荒れて雨が降る。その雨のやんだ翌日は、村の小川が泥濁りになる。人の家の垣がちぎれて來たり、池の水口に咲いてゐる溝萩の花や蒲葦が根こぎになつて流れて來たりする。その中を池の飼鯉が逃げて出たり、稻田の中に大きく成つた鮒が、水口が落ちたので逃げ込んで來たりするのを掬ふのが面白さに、泥まぶれになつて、籠を腰に、ざるをさげて飛び廻つたのであつた。——その流れの末は何處かと訊けば、皆な越後の海だと教えられた。

我が信濃の児童等が、深い山と山との中に立ちかこまれてゐて、水流の北に走るのを不思議がり、「何故川は北へ行くね」と訊く毎度に教えられるのは、如何様な田の間のせうら水でも、谿の中から流れ出る清水でも、自分等の使ひ捨てる井戸の水でも、皆落ちて流れて未は集つて越後の海へ行くのだとの事であつた。

この「越後の海」といふ語は、如何程の不思議な力を信濃の児童等の頭に響かせる事だらう。「海」といへば直ぐ越後と思ふ。少し物心づいた児童等で、越後の海を見たいと思はない者は殆んどない。私の知つてゐるある女の兒は、學校の友達と一所に連れられて行つて、初めて越後の海を見、年來の思ひの達いた悦しさに、吾智の海岸の砂山の上に座つて、泣いたといふ話も聞いた。

憧れてゐる海だ。中央信濃の峯々谿々、森の中林の中、草木のしづくをもあつめて、高原の上を馳け廻つて北の空を望んで、あの山の遠い向うには晝でも夜でもどうとうと寄せて来る大波の海のあるのを夢にまで思つてゐる信濃の児童等の思ひを載せて

遙々百里の行程を、山岳を突破り平野を縦横に走つて、今海に来て眠つてゐるのは此信濃川の水だ。

私は尺にも満たない流れの中に眞白い水草の花を浮べて流れてゐる此河の源を知つてゐる。いや、その源の地、夏草の厚く茂つて、藪だゝみに流れがかくれて姿の見えない上を飛び廻つて大きくなつた児童の一人だ。今はその水が疲れたやうな、大人びたやうな、また何處か成し果てたといふやうな微笑を浮べて、たゞゆたくとしてゐる川の姿を目のあたり見ると、何となく不思議な思ひがせずには居られない。

信濃川にもう源流のやうな勢が失せたのか知ら、私は水上に於ける洪水の恐ろしい光景に幾度接した事か知れない。新潟の案内をして呉れるといつて先きに立つて行く汽車に同乗した土地の人に訊くと、「何に大水だつてびくともしやしねや」、「いや、岸へ溢れるやうな事は無いかね」、「何びくともしやしねや」、——何がびくともしないのか一寸と解らなかつた、が克く聞き直すと、水量は増す事は増すが橋下で一丈か一

丈五尺位、それ程の水でも、此四百八十間の長橋萬代橋はびくともしないといふ土地の人としての誇りであつた。——平原の國へ出て来て流れがゆるやかになつた故に、洪水の荒れる事もそう甚くはなくなつたものと思はれる。

が、河口には河口に供ふ別種の恐ろしさがある。信濃川は河口に来て只眠つてばかり居るのでは無いやうだ。

それは、北風が少し荒れて、潮が逆に河口に打込んで来る時の事だそうだ。河は逆浪に激しく高く捲きあがり、捲きあがり。遠く海上へ出て幾日も漁りして、幸を載せて歸つて来た舟が、家近くなつて、此河口へ乗り込むと、今まで戦つて来た腕も幾分ゆるみ、氣にもゆとりが出来る。その故か、忽ち逆浪に捲き込まれて、船を破り命をも捨て、しまう事が少くないそうだ。

以前は河流であつたのが、押し出して来る土砂が積んで、流れは中途で打切られ、水は半ば砂で包まれて、海に向つて広い口を開けてゐる處がある。焼島潟といふのだ

そうだ。その周囲は蘆荻が叢生して、鴨や鶺鴒が群集して来る。遊獵家の目をつける場處だが、昔時からの習慣で、何人にも手をおろさせない。群鳥が避難所として秋から冬にかけて、がや／＼鳴いて附近の家は夜も眠れない位だそうな。

——此焼島潟附近が漁師船にせよ、運送船にせよ最も危険な所として警戒を怠らない。少し沖からの風が荒れると、ばさ／＼ばさ／＼いつて潮は蘆荻の葉をおつかぶせるやうに打込んで来る。と、群鳥があ／＼と鳴いて騒ぎ立てる。「今夜は浪が危えぞ」と、村人が言ひ會つて居ると、夜半頃にキイ／＼と櫓聲勇ましく、酒田邊から乗り込んで来る帆前船が、馴れない水先案内でも載せてゐやうものなら、間違ひなく、深夜に救ひの呼び聲を立てる。「そら」といつて村人は高張提灯に、待ちかまえてゐた救船の綱を解いて乗り出す。此様な事は年に何回もあるそうだ。信濃川は眠つてゐる中にも同じ水上の力を包んでゐる。

萬代橋を渡り終ると、落日の光は對岸の家の屋根、柳林の頂にうすれかゝり、半

天てんに最後さいごの紅くわいをうすくぼかして、河かの水みづは濃こい藍青らんじやうに湧わくやうに見みえた。案内あんないして呉くれた人ひとの宿やどはことはずつて、橋はしに近ちかい家いえに泊とまりを求めた。

山
影

山 影

南向きの室の障子を開けると、いつも向ふに山影が見える。信飛境の中央山系の支脈で、山はさう高くはない、が、西から東へ亘つて、餘り遠くない距離を隔て、村の南方を繞つてゐる。其山の麓には大きな根の森がまるく茂つて、山の中腹は稍平か、中腹から以下一面杉林で覆はれてゐる。其上の所に十坪か二十坪程かと思はるるだけ、棚のやうになつて段を作つてゐる。

中腹以上は岩質と、低い雑木とが包んでゐるやうだ、が、其頂から左右をおろして來るなだらかな、ゆるやかな、ゆつとりとし線は、次第に低く長くひいて、兩方に波の走るやうに、同じ山脈の頂を劃してゐる。其山脈の中で、此山だけが特に秀でゐる。

舊い農家の南向きの一室、四方から楓の葉がおつかぶさつてゐる中に籠つて、其室

から南方の此山を見る時の心、如何にも静かだ。どんな激情を持つた時でも、どんな不平を持つた時でも、此室へ來て此山に向ふと、向つたいけで、自ら慰められてしまふ。碧の空の果てを劃してゐる山の線のゆるやかな、なだらかな故であるか、中腹以上を覆つてゐる淡青の色の、何とも言ひ難い爽やかな感じを興える爲めか、其麓の古木の森の姿の雄大なためであるか。何だか知らない。私には解らない。只自分の心が静かになつて來る。眞面目になつて來る。心かなごんで來る。澄んで來る。眞の自分の目を醒めてゐる時だと感じて來る。萬象があまりのまゝに心に映すると覺える。物も人も、人と人、物と人との關係が劃然と解る。一點の微細も胸に寫つる。どんな小さな響きでも自分の頭の一角に觸れずして過ぐる事はないやうな氣がする。意識の最も明かな時だ。どんな紛叫した問題でも解決がつくやうな氣がする。何事が起つて來やうとも動じないと自信を覺えて來る。

何故だか解らない。解らせたくも無と思ふ。私は祈禱が人の心を平靜にする經驗も

知つてゐるが、此山に向ふ時の心持は、一層長く一層深く平安を保つやうな氣がする。人と争ひを起したり、いやな思をさせられたり、途方に暮れて手を下だす事も出来なく成たり。周囲が迫つて、只氣まぐれな、其時其時の氣分で何の統一もない生活を送つたり、怒つて見たりぢれて見たり、家を飛びだしたりして見るときでも、不圖、森を麓にした其山の姿を思ひ浮べて來ると、氣が静かになる。静かな心、弱者が求める唯一の立場かも知れないが、私は此静かな、何物でも有りのまゝに心に浮ぶやうな其境を求めぬ。私にはこれが唯一の嚴肅な心持になれる時だ。

殆んど定が無い。不圖此山が目に見えるやう思ふ時に心が平かになる。突然平靜な境が心に浮ぶ。いつでも此時の心持でゐたいと思ふが、またすぐ亂れてしまふ。混亂する。果して自分の意識に統一があるか知らと疑ひたくなる。確かに或時は此意識の統一を無くした時がある。只幸に其意識の混亂期が他の時よりも短かい爲に、狂ひにならないですむやうに思ふ。狂と不狂との間に日を送つてゐるやうな氣がす

る。纖弱な微動の爲めにも心が全然攪亂されてしまふ。神經の調子が狂つてしまふ。或時は肉體の病氣の爲めかとも思ふが、また翌日は平常な調子に復する。何方が自分の本然の状態だか解らないやうな時がある。妙に元氣づいたかと思へば、譯もなく物事が厭になる、おつくうになる。こんな事をしてゐたらば果ては如何なるだらうと當てもない此「果て」といふやうな事を思つて見る。肉體も神經も意識も、へと／＼に疲れ切つて、あえぎ／＼途を歩いてゐるやうな氣がする。そして時々思ひ出したやうに、馳け足をやつて見るが、長くつゝかすにまたあえいで歩いて行く。

其様な時に、不圖、實際不圖、青い空の下に悠然と立つてゐる山の姿と、其麓を繞つてゐる太古のまゝの森の姿とが、見えて來る時がある。はつと目が醒めたやうな氣がする。わけも無い事に争つたり、只混亂の中に何事とも解らず掴かみ合つたりしてゐたのが、おさまつて、爽かな風が吹き通る。飽まで謙遜な心持ちになれる。疑乎と目を見張つたまゝ、耳を澄ましたまゝ、何日まで、も居られるやうな氣がする。今が

眞の自己のライフを意識してゐる時ではないかしらとやうな心持がする。
 長い間そんな氣持になれない時は、耐らず苦しい。目をふさいで道を通るか、地の中でもむぐつて行くやうな氣がする。命が伸び、生が擴張すると感するのは其山に對して起つた時だ。

威力ある七月の空は淡青に輝いて、日の光は峯々谿々に直射する。杉の林を出て、焼山の草が深く伸びてゐる中に立つてゐると、青草の野を隔て、山の姿は悠然として其眞青な空に向つて立つてゐる。其山の中腹を、今は鐵路が通じて、折々汽車は山谷に響を飛ばせて通つて行く。幾年も見なかつた其山の夏景色だ。麓の楓の森も依然として舊のまゝに濃緑の色を集めてゐる。山の中腹の平地は草が厚く伸びたかして、前よりは廣くなつたやうに緑をしいてゐる。中腹より上は岩角と草原と矮林とで、陰影がはつきりついてゐる。爽かな山國の夏景色、空氣は澄んで、一二里隔て、さきの杉林の木枝までも明らかに見られるくらゐ、山の頂の空に接する、なだらかな線も、手

でなで、見たいやうな思がする。——今日のあたり見てゐる此景色は果して實境かしらと、不圖疑つて来る。折々夢のやうに胸に浮んで来て、夢のやうに消えて行つた山の姿だ。今其山に向つて立てゐるのだ。向つてゐれば何の思もなくなつて了ふ。争闘とか不平とか、煩悶とか、そんな事は何も思はれない。いつも同じ沈静な姿、いつも同じおだやかな姿、何故此同じ姿、同じ心で自分は物を見、物を觀じ考へ、行はないだらう。山は吾が生を教えてゐるのではないか。取り亂した姿の醜のを深く感じながら、取り亂さずには居られない自分の身の弱さを覺える。何をするのか、目當てもなく、只取り亂し、取り亂して生を送つてゐる。平静で、沈黙で、謙遜で、嚴肅な、萬象映するまゝ映じ、知り、考へ、動く、恒久の姿が、何故自分の身には得られ無のだらう。仰いで山を見たり、日光を見たりするのを忘れて、いつも地に伏して歩いて行くのだ。打當るものがあれば、もぐつて其中へは入つて通つて行かうとする。上からも横からも見る暇がない。分別なしに打當るまゝに打當つてゐるのだ。達した、爽かな、

明敏な思を抱く餘裕がないのだ。何故冷靜な思慮が得られないのだらう、醒めて冷たく物を見る事が出来ないのだらう。——山はじつと立つて、日を受けて青い色に輝いてゐる。

花 瓶

大きな唐金の花瓶だ。

私の家に昔時から傳はつてゐるものだといはれてゐる、床の間に据ゑられて、いつでも同じ姿をして立つてゐる。

が、此方に向つた方は、黒く光る表面の稍々曇つたのに、蜀道の嶮と、一箋の徑とを刻んである。其徑の上を牛を追ふ牧童が通つて行く。

丈けは三尺以上もあるの、細かに刻んだ山水が層々累々として、雲に入る蜀の嶮道が如何にも浮び出るやうに見えてゐる。牧童の姿も生々としてゐる蒼古の色は全體を包んで、何處となく重くるしい、又もの／＼しい所がある。

不思議にも私はまだ一度も此花瓶に水を充て、花の指されたのを見た事がない。瓶が大きくて、それに相應はしい花の枝の無いためだらうか。花を指さずに只飾りに据

ゑつけて置くのだらうか、私には解らなかつた。

或時座敷の掃除をした。床の間の塵を掃ふために物を片つけた。其花瓶も暫く取除けられて座敷の真中へ持ち出された。見ると、恐ろしいではないか、其花瓶の向ふの面——今迄で床の間の壁に面してゐた方には、大きな縦の傷が、深い廣い口を開いて瓶の肩の所から斜めに長く走つてゐるではないか。

破れ目は今新たに出来やうに、少し震えてゐるやうにも見える。が、よく注意して見ると其破口にも塵がついて白くなつてゐる。近頃出来た傷ではない。が、其傷口が長く開いて座敷の真中に黒く光つて立つてゐる姿は一層物凄く見えた。痛々しい傷は、何日出来たものだらう。作る時に過つて出来たものだらうか。持ち運ぶ間に、いつとなく傷めてしまつたものだらうか。此床の間に据ゑられてゐる中に、自づと罅が入つて烈開したものだらうか——一向解らない、何人も知つてゐる者が無い。けれど、見てゐると、どうも其花瓶にはなくてはならない傷口のやうだ、其裂開の個

所をふさいばら如何だらう。花瓶は形を損じてしまひさうだ、初から開いてゐて、いつまでも開いて居なければならぬ傷口だ。

光が射すやうな氣がする。黒い光が其傷口から射すやうな氣がする。破れ目の兩端がふる／＼震えて、花瓶全體が一種の音響を立て、うなり出し、其うなり聲が室中にみちて、破れ目が相方打ち合ひさうになるかと思はれる。

座敷は片附けられた。塵は拂はれた。花瓶は復び床の間に直された。前と同じに破れ目は壁の方へ向けられた。が、私はそれから一人で、其室へは入るのが怖ろしくなつた。一人では入つて来て、其花瓶が不意に此方へ向いて、其傷口を自分の方へ向けたら如何しよう。そして怖い響を立てたら如何しよう、——私は二度と復び其室へは入つて来ることは出来なかつた。

今でも其花瓶は黒い色をして、昔時のまゝ床の間に据ゑられて立つてゐる。花は一度として指されたことが無い。

おそろく此花瓶は、其おそろしい傷口を守るためのみに作り出されたものであるまいか。

荷 車

私の家の軒下に大きな荷車が挽き据ゑられてある。餘程以前から使はないものと見えて、車の輪についた土が白く乾いて、輪金は赤く錆びてゐる。輪は太く、輪金の幅は広い、此車が動き出し、廻り出したらば如何な地響をさせて、轉じて行くことだらう、私はよく其車の傍へ寄つて其様な事を思つてゐた。

でも、夜の間にか、それとも晝間人の知らない間にか、其車が動くものと見えて、前の日見ておいたよりも三四寸づゝ輪が前へ出たり、後方へ退いたりしてゐる事がある。何人が車を動かしたのだ、と訊いても判然らない、知らないといふ。私は不思議に思つた。夜の中に獨りでに車が動き出すのではあるまいか。

朝起きて、其車の傍へよつて立つて見た。車は何の音も立てず、梶棒を下げ、後方を上げ、二つの輪は何物かの大きな眼珠のやうになつて、引き据ゑられてゐる。軸へ

塗る油の色は乾いて、其軸から八方へ出てゐる輪骨の色を失せ、眠つたやうにしてゐる。

勢よく走つた時であつたらうか、大地の黒い匂りの上に幅廣い深い轍の跡を印して、其跡からは地氣が立ちのぼつた事もあつたらうか。堅い敷石の上を噛み合ふやうにして、元氣の好い音を立て、走つて行つた時もあるだらうか。

朝日が光を投げて、其眠つてゐる車の姿を照らしてゐる。それでも夜の間に少しづつ前と後とへ動くのは何だらう、眠つてゐる車が夢の中で自から動きだすのだからうか。自分から動きだす力などは何處にも籠つてゐさうにも思はれない。

不安でたまらない、此車は動くのだからうか、動かないのだからうか、若し獨りでに梶棒をあげて、兩輪が動きだしたら如何だらう。眞一文字に町の中を、往來の人をつきのけて駈け出して行つたらどうだらう。何處まで行つたら止まるだらう、止まる所なく何處までもく駈けつて行くだらうか、私は不安でたまらなくなつた。

其夜だつた。恐ろしい響がした。家じうが鳴り渡つて、ごろ／＼、ごろ／＼と物渡い響を立て、車は動き出して行つた。其響は町ぢうの家々の中迄ひびき渡る。うなるやうな貫くやうな、幾百年もの怨みが一時に出たやうな響だ。聞いてゐる自分の身は其響くたびにしびれて来るやうな氣がする。心臓の鼓動も烈しくなる。身の毛もよだつて来るが、次第／＼に其聲は遠く／＼、闇の中にかすかに成て、細い楽しい鈴の音のやうになつたかと思ふと、私は不知不識、夢の中には入つてしまつた。

朝日が窓から射すので、急いで飛び起て軒下へ出て見た。何處へか、町を通つてかけて行つたと思つた車は、やはり昨日のやうに軒下に何の音も立てず横はつてゐる。梶棒も地へつけられたまゝ、兩輪は怪物の閉じた眼のやうに少しの輝きも見せない。が、見ると庭の土の上には幅廣い太い轍が二本、深く地に印せられてゐる。はつと思ふと、私の全身は水をあびせられたやうになつた。

やはり車は夜の間に自づと動いて走り出したのだからうか。

鐵 軌

不圖空中に大きな圓形の軌道の一部分が見えて来る、それも赤くさびて、周圍に長くのびてゐる葦草の中に埋没して了ひさうだ。何故そんなものが目先きに浮んだのかわからないが、不圖机に向つてゐると空中に見えて来る。それも一度ではない、二度も三度もつづいて見ることもある。初めは何處かの停車場附近で見た圓形の軌道の一部だらうと思つてゐたが、しう念く見えるので、果てはうるさいより恐はく成つた。赤錆びた一條の鐵軌だ。太く大きく弧を描いて、其弧が一つの圓を完成したらば如何様に大きな圓が出来来る事だらうと思はれる。一體何の爲めに作つた軌道だらう、何時何人が作つたものだらう、凝乎と眼を据ゑて其鐵軌の草の中にうねつてゐるのを見詰めてゐるが、何の物音もない、何時の世からといふこともなく、何時の世までといふこともなく續いてゐるらしい。草に没して見えないが、求て行つたらば、行けさうに

見える、が、いつか其軌道の端へ出る時があらう、其端が碎け破れて、痛ましく傷つてゐる所を見ることがあらう。其れを見たらどんな氣がするだらう。——何か大きなものが此の上を通つた跡だらうか、それとも、何人が計畫だけ立て、手は着けたが、そのまゝに打捨つてしまつたのかしら。恐ろしいことだ。勞苦して此様な重いものを据ゑつけて置いて、どうもせずに其人は何處へか行つてしまつたのだらう。一體何人だらう、此軌道の施設者は、と思つて、私は一心に、机に倚つて其恐ろしい未完成の軌道を見詰めてゐた。——すると其赤錆びの最も烈しい右手の草の深い邊から、何か見え出して來た。何だらうと思つてゐると、次第に動いて來る。黒いものだ。小さな姿をしてゐる。赤錆びの上をちよこく走つて來る。兩手で高い草を拂ひながら、危く落ちさうにするのを調子を取て小走りにかける。出て來た。正面に私と向ひ合つたと思ふと、不意に其の人は立ち止まつた。見ると、別に普通の人以上より小さくもない、中太りの姿も立派で、頭髪は濃く、顔は細く、色は蒼白く、何か求めてゐるや

うに、下を見たり、上を見たり、左右どちらをも見たり、少しも落ちついてゐない。手に物指のやうなものを持つて、鐵軌の高さや厚さを計つて見たりして、仔細げに小頸を傾けてゐる。正面に見ると、何處か見覚えのある顔だ、何人だらう。何處かで逢つた人に違ひない、何人だらう、と思つてゐると、胸に閃めいた。それは私だ。私自身だ。私自身が今軌道の上に立つて、物指しで赤錆びた鐵を計つてゐるのだ。さうだ。此は私に違ひない。「あ」と聲をあげた。見ると、その鐵軌はもう空中に消えてしまつた。私の姿も見えなくなつた。が、恐ろしさが身に迫つて來た。あれが私だらうか、私は今でもいつでも、あゝやつて日を送つてゐるだらうか。同じことを何年も何千萬年も、同じに物指を持つて鐵軌をはかつたり、小頸を傾げたりして居るのだからか。——此れが私達の運命なのか。いや人は知らない、確かに私はさうだ。不具な孤を傳つて歩いてゐる人間だ。何處までも行けるやうな氣がしてゐるが、實は同じ範圍を、しかも同じ不具な一部の鐵軌の上を行つたり來たりしてゐるのではあるまい

か。——私は耐らなくなつた。眼を閉ぢた、閉ぢてもだめだ。空中の軌道は同じく眼さきに浮び出して來る。立つた。立つて机を離れて室の中を歩きまわつた。が、一寸と立ち留ると、すぐ草隠れの軌道が、大きな蛇の腹のやうにのたうつてゐる。たまらず駆け出した。駆け出して町の中を飛びまわつてゐると、周圍が騒がしいので、例の道軌も騒ぎの中へ没せられるのか、見えなくなる。

私は其後家へ這入つて、机に向ふのが何より恐ろしくなつた。なるべく室へは這入らずに、町の中を歩かう歩かうと努めてゐる。

鐵 輪

空中で無数の鐵輪と鐵輪とが纏れ合つて怪しい響を立てるのを聞いた。いや私は實際それを目撃した。

その鐵輪の中には黒い飽まで鋭い鐵の光りを發して、それが空中を動きまはるにつれ、周圍の空氣まで怪しく唸るやうな、又一種の鋭い光りを空氣に傳えるやうなものもあつた。中には、光りも動き方もいかにも鈍く、少し遠くなると、その形すら見失ひさうなのがあつた。形には大小幾多の種類があつた。そして各々の輪は、初めの中は何とも解らない集合的の盲動をやつてゐた。大宇宙の或場所に、星雲の不可思議な活動を見る如く、渦紋大渦紋、總てが動き、總てが走り、總てが上下左右にうづまきかへつてゐる。それが次第に何處にか中心點を見出したのか、回轉の度が烈しくなる、とその星雲のやうなうづまきの中から、此處彼處に劃然した小活動の中心が分裂して來

た。分裂するにつれて、その中に小さい鐵輪の形がいくつもいくつも、雲を排して彰れるのを讀む事が出來た。或は一列に長く連らなつたり、圓陣に固つたり、更に見分けの附かない混雜の集團をなし、縦に伸び横に布いて、苦しまぎれの蛇のたうち廻るやうな形をとることもある。

が、注意して見ると、それ等の輪はどれも皆相連らなり、くひ込み合つて、一つの輪に八つも十も、他のが交叉してゐるものもあるが、或は一つに只一つか二つ交はつて居るものもある。もうその背景をなして居た雲のやうなものも次第に消えて、はつきり輪だけが相錯互して空中を縦横無盡に動きまはつてゐる。

その響の怪しくすぎましいこと、聞いてゐる者は、思はず齒ぎしりをせずには居られない。腦の中へ鋭い太い錐でも刻み込まれるやうで、身軀じうがぞつとする。ギイギイ、と相刻み合ふかと思ふと、ガチャンと音高く響かせて、離れやうとするが、八方に連なり合つてゐるので、離れる術がない。互にもみ合つて輪と輪はすれ切れるかと思ふが

切れない、その交叉點からは火花が散り、煙があがり、まわりの空気を紅く染めるやうだが、ついに切れおほせない。輪と輪はあがいてもがいて、八方にその響が傳はる。一個所でこの烈しいものがきか初まると、その波動は傳はり傳はつて見える限りの輪全體が響を立て、もがきだす。

愁ひの響き、嘆きの音、背景の星雲は消えても、此怪しい音と色とで空中全體が妙に曇つて、いつまで立つともその曇りは晴れさうにも見えない。ばらばらになりたいたい、一つ一つにそれ等の輪は自由に動きたい。自由に動いて無限の宇宙の中を飛行自在に翔つて行きたいやうに見える。が、初めもなく終りもなく、見る限り聞こえる限り、空中は此鐵輪で埋まつてしまい、此打ちつ引きつする響きで充ちてしまふ。

私はじつと空中の此の怪像の盲動を見つめてゐた。一生懸命をしづめてそれ等の發する怪音を聞いてゐた。初めは私の眼前に、只平面的に連れ合ひ、相交り合つて動いてゐたそれ等の鐵輪は、次第に數がまして來た。背後から背後からと幾千幾百

幾十萬となく數知れず押し合ひ攻めあひ、糾れ合つて彰はれて來る。従つてその響は空中で響く音として聞いてゐるといふやうな、手ぬるいものではなくなつた。

もうその中の一つでも、如何に力を籠めて前後左右に連らなる連鎖を断ち切らうとしても、上にも下にも縦横無數に壓せられて、何處へも飛び去る一寸の隙間さへなくなつたやうに見える。いやそればかりではない。その連鎖を断ち切つたならば、その一つは直ちに四面八方から壓し寄せる無数の同じ鐵輪の爲めに潰されてしまひさうだ。初めは互に脱れやう、逃げやうとしてゐたのが、もう今では、互に潰されまい、壓せられまいと押しあつてゐる。輪と輪との内側で烈しくきしり合ひ、いがみ合ひ、火花を立て、居たのが、どれもく鐵輪の外がわと外がわとが觸れ合ひすれ合つて、その肩から角から、鐵のこまかにすり刻んだ極く細い層がぼろぼろこぼれ落ちる。その音も前より一層窮屈で、一層迫つて來た。

私はもう耐らなくなつて來た。此等の鐵輪が私の頭の上に動いて來たらはどうしや

う、その音の中へ頭を入れたらばどうしやう、と、思つて、不圖、頭を返して見た。見ると驚くではないか、その響きの姿、前方に彰はれてゐる同じ鐵輪の集塊は、私の後方にも一面無限にツイいて動いてゐるではないか、はつと思ふと、いつの間にか、前も後も鐵輪の塊團は連結してゐて、私の身の上も下も左右前後盡く此黒い恐しい小さな輪の連結でとざされて、それ等がひしひしと私の身に迫つて来る。あゝ、もう肉に喰入りさうだ。頭でも顔でも、手でも肩でも膝でも、めりめり音を立てゐる。その刻み合ふ音は、ギイと私の身内で鳴り響くまでになつた。

あつと、最後の力を籠めて私は膝を擧げた。私の身のところ／＼に節々の痛みは感じたが、それでも、今まで八方から襲ひかゝつて來た不思議な鐵輪の怪しい塊團の姿は最早や消えてしまつた。

黒 影

私の立つてゐる前に不圖黒い者が見えて來た。全身眞黒で、口嘴が長く、眼がくぼんで二つの點のやうだ。近くよつて來るまゝ、口嘴は開けるが、物は言はない、只怪しい聲がするやうな、しないやうな、見てゐるうちに後方へひきさがつて行くから、もう消えるかと思ふと、こんどは私の左へ出たり右へ出たりする。口嘴は開くかと思へば、閉ぢ、閉ぢるかと思へば開く、醜く、寒く、身慄ひがする、——一生懸命で逃げやうとするが、いくら逃げても、私の行く先にはきつと出て來る。

私は一度町の中を通つて行つた。店屋の軒さきを見ると、其處にその黒い影がゐるではないか。わつといつて逃げたぞうとするが、身がすくんで動けない。すると、其黒い影は立つて、右へ左へ私の前を行く。何と思つても私はその行くまゝに、右へ左へ向けられるではないか。情けないな、一人の人間ではないか、こんな黒んぼなんか

引かれてどうするんだ。齒を噛みしはつたがだめだ。すん／＼立つて先きへ行くが、とある角で、不意に黒法師は消えてしまった。私は非常に氣が樂になつた。急いで飛んで、町を出はづれて郊外へ行つて見た。四月の初旬、草が伸び、風が吹き、蝶も飛んでゐる。ほつと一息ついて、草の上へ腰を卸し、生きかへつたやうに蒼空を仰いだ。若草の道は野の上に縦横についてゐる。此處を通つて幾人もの旅人が旅行に出掛たことであらう、道の側には草鞋がはき捨てゝある。何人が休んで、何人が捨てゝいつたのだらうか、見ると、その草鞋の向ふに竹の皮が捨てゝある。握飯でもつゝんで来たのだらう。まだ休んで間もないのか。握飯の喰ひかけが草の中に白く見えてゐる、と思ふと、其の邊の土が少しむら／＼動き出した。何だらう、次第に動く。見る／＼土が高くなつて、出て来た。例の黒い姿。私はもう耐らない、命の限りだ。此處こそは後方を見ずに足の限り、走りに走りて杜の中へ飛び込んだ。後方を見ずにじつと耳を澄ましたが、何も来るやうな音もしない、でも恐ろしいので、私は前方ばかり

見ながら、杜の中へ深く／＼は入つて行つた。若葉の木々は銀白に純緑に、枝の端を飾つてゐる。風が来てそよ／＼ゆれてゐる。それを見てゐると、もう何もかも忘れて了つた。黒い姿も何もかも……

一體何だらう、あの黒い形、私にはわからない。何だか知らないが、私が唯一の逃げ場處は森の中だ。此處へ来てさへるれば、決して彼奴はやつて来ない。黒い法師は杜の中がいやだと見える。

泥 路

真直ぐな一條道、乾いた日の晝間ならば、軽く吹き過ぎて行く風の後から、小さな渦巻を起して、白い砂塵が追掛けて行くのであるが、一日中烈しく雨が降つて、夕方から小降りになつたものゝ、まだ煙つて小雨が霏々と舞つてゐる。

軍馬が通り、幾百の兵士が重い靴の足を引きづつて歩いて行つた跡が泥に深く刻まれて、ぐちやぐちの路は高い足駄も一歩毎に埋つて了ひさうになる。力を入れて通つて行く。真暗な中を一歩一歩、無限に遠く行くその闇を押し破り押し破り、幾重にも幾重にも自分の周囲を取り巻いてゐる真黒な輪を、只自分一人が動くにつれて遠く波動を起させて通つて行く。此自分の一身を中心として起る波動は何處か知らず、何處へか行つて大きな音を立て、打當るのではなからうか、それとも何物かの表面に黒い波を刻んで、幾年たつてもその波の形は消えずに残つてゐるのでは無からうか――

私はそんな事を思ひながら、闇の泥路を一人で歩いて行つた。

ぱつと光が射した。不意に道側の家の戸が開いて提灯が一つ家から出て来た。婆さんらしい人が右手でそれを提げながら、左手で傘を持つて路に歩き出した。「ちや氣を付けて行つていらつしやい」と、戸口から聲が聞こえる。「あゝ、ちや行つて来るよ、早く閉めてお休み」と婆さんは一寸と振り返つたが、そのまゝ歩み出した。戸は暫く閉められずに、光はくつきりと泥の上を照らした。足跡の大きなのに水が溜つて、小雨がそれを叩くと、小さな飛沫がとぶ。ちややくちややくと、小さな山や川や湖や谷を作りだしたやうな泥が、光を受けた其處だけ、争つてむくむく頭を持ち上げられるやうに見える。と、ぴたりと戸がしまつて、泥の浮彫りはまた闇の中に消えてしまつた。

私の目の前には今瞬間の泥の姿が浮んで残つてゐる。先きへ行つた婆さんの姿は横町へ曲つた。そして提灯の光も見えなくなつた。私はまた、とぼくとぼくと同じ路

を歩いて来た。

雨はまた烈しく急に降り出して来た。ばちや／＼傘を叩く音が高く、水は傘と柄とを傳つて下へ落ち、泥をはね飛ばし、泥水を高く擧げる。闇い空中全體は争つて、落ちて来る雨の音と、其球が途中で互に打當つて碎ける音を、空気を突き貫く際に立てる一種の音とが相混じてゐるのだらう。賑かになつて来た。騒がしくなつて来た。何者か目にははつきり見えないが、群をなし隊を組んで、鐘太鼓を叩きながら踊り廻つて、其邊をあちこち行きめぐつてゐるのではなからうか。私の足許を、私の傘の中を、鼻先きを、空中全體を、と思ふと、私は面白くて耐らない。下駄をぬいで、尻を端折つて、洗足のまま、無闇に飛んで歩きたくなつた。狂い廻りつてゐるきたくなつた。

泥と水と人とが一緒になつて騒ぎ廻るといふやうな事は、此様な夜を置いては他にない、しかも安全な一條道だ。固く白く乾いた上を、こつ／＼と無情に靴や下駄で踏

つけて歩くより、私にとつては泥の中に汲ひ付けられて、水の中に浸つて、共に動いてゐる事が、どんなに愉快であるかわからない。夜なんか明けすも好い、雨はいつまでも休すにふれ。私は何處までも何處までも、此まゝ闇と泥との中を歩いて行きたくなつて耐らなかつた。

空 椅子

廿人許りの人がストーブの周圍に輪を描いて集つてゐる。ベルが鳴ると、その人々は出て行つて、約一時間も立つとまたベルが鳴る。その人々はまたストーブの周圍へたかつて来る。

いつ見てもそのストーブの直ぐ傍に一脚のから椅子がある。脚も脊も黒く塗つて、黄褐色の羅紗に唐草を織り出したのが、年経て色褪せて端の方からは少しばかり心が出てゐる。普通のものよりは少し低い。一體何人が何日掛け初めて、それから何年たつのやら、別に何人にも訊いて見ないから解らないが。此學校が出来てから十五年になる、少くとも十五年以前のものでは無いらしい、それでも何人かいつか腰を掛けた事があるであらうか、私が知つてからも三年にはなる、が、私は如何したのか、何人も此椅子に掛かつたのを見た事がない。その癖いつも屹度冬になれば他のものと

同じくストーブの傍へ引き寄せられてゐる。一體何の爲めに此椅子は此室に据ゑられてあるのだらう。

廿人の人は皆勝手に坐を取つて、なるべくストーブ近くへ寄つて、両手を伸べたり足を突き出したりして暖を取る。そして盛んに用も無い話をやつてゐる。が、いつも此椅子は主がなくて立つてゐる。皆は、一寸い一寸い此椅子を尻目にかけて見るが、また知らないものゝやうにして、他を向いて謀つてゐる。ベルが一つ鳴ると、總立ちになつた人々はどや／＼室を出て行つてしまふ。後にはさまざまな向をした椅子がストーブの周りを取圍んでゐる。黙つてストーブを包圍してゐる。コト／＼コト／＼暖爐は音を立て、何か話し掛けるやうだ。時計のセコンドの刻む音のみが高い。心のかゝつた唐草模様の椅子は朝から晩まで、一月から二月まで、同じ方向をして立つてゐる。

私は或時、此椅子へ手を掛けて、腰を卸そうとしたが、不意にその時、皆の視線が私

の方へ向けられて、一種嘲るやうな、馬鹿にするやうな、また何處ともなく嫉むやうな、それへ掛けて見る只は置かないぞといふやうな顔色を見せた。が、私は其時のはづみで、何に關する事はない、無理にも掛けようかとした。何だか掛けたら心持が好さそうに思はれて耐らない。一思にとつさり腰を卸ろそうとした。と、皆の顔が一層密に近寄つて、その集合の力は私を思ひ様遠くへ反撥しようとするものゝ如く思はれ、實際、私は知らずくその椅子から離れて、他の椅子へ腰を卸ろしてしまつた。

今迄で急に迫つてゐた室内の空氣は伸びやかに、皆の人は以前と同じく何事も起らなかつたやうに元氣よく話してゐる。私も皆と一緒に談笑の仲間入りをした。何の爲めに今のやうな事をしたか、我れながら解らなかつた。皆にも解らなかつたものと見える。一言の此れには言ひ及ぶものがない。私はストープの方へ手を伸ばして、じろりとから椅子を見た、皆もまた一時にちろりと見たやうに思つた。私は腰掛けて見たい、何人の爲めに設けられてあるか知らないが、何となく引きつけられるやうな、掛けた

らばさぞ心持よく、樂だらうと思ふ様な氣がした。けれどももう立ち上つて、それに手を掛ける勇氣はなかつた。

三年前も三年後も同じく、唐草模様の脊と黒い脚と、心の少し出かゝつた其舊い椅子は、同じ姿をして立つてゐる。夏は窓の下に、冬はストープの傍に、何人を待つてゐるのだらう、如何なる人が來て掛けるのだらう、恐らく永久に掛ける人が無く此儘であるのではなからうか。

いや何處へ行つても人の集つてゐる室には、此様の椅子が一脚づゝあるのではなからうか。

らばさぞ心持よく、樂だらうと思ふ様な氣がした。けれどももう立ち上つて、それに手を掛ける勇氣はなかつた。

三年前も三年後も同じく、唐草模様の脊と黒い脚と、心の少し出かゝつた其舊い椅子は、同じ姿をして立つてゐる。夏は窓の下に、冬はストープの傍に、何人を待つてゐるのだらう、如何なる人が來て掛けるのだらう、恐らく永久に掛ける人が無く此儘であるのではなからうか。

いや何處へ行つても人の集つてゐる室には、此様の椅子が一脚づゝあるのではなからうか。

砂 塵

積殻の藪を境ひに赤土の原は人家の背後まで廻つてゐる。二月の末からかけて三月の中旬まで空気は乾き切つて、夜間はまた寒さがなかく、嚴しいが霜も置かない。藪の切れ目を出ると、此赤土の原の上を一條の真直ぐな路が、何人が踏み初めたともなく踏み固められて、長くついてゐる。駱駝の通ふ沙漠の路のやうだ。朝日の柔かな光りが此黄ばんだ一面の原の上を照らす頃は、まだ原上に何等空氣の動搖は初まらない。乾草を積み上げた藪添の南側には、五六匹の野良犬がベタベタと死んだものゝ様になつて固まつて横はつてゐる。夜の間、影を追ひ音を求めて原の上を馳廻つてゐた奴が、疾れて休みを求めて居るのらしい。ピラミッド型の高い草土手の下を、五十騎ばかりの騎兵の一隊がたく足を打たせて通つて行く。ぱつぱつと土煙が舞上がるが、高く捲き登るでもなくそのまゝあたりへ四

散してしまふ。草土手の表面は黄に枯れたまゝになつてゐるが、近よつて見ると、枯草の根元に薄く青味がさして來てゐる。何の生氣もなく高く立つてゐる此土手にも一脈の氣が通つて來てゐると思はれる。

遠く野の果てを繞つてゐる山脈の上に、西の空から孤つ白い雲の片が浮び出したかと思つてゐると、やがて一面に眼路の限りを埋めてゐる森の頂を揺がせて、西風が吹き起つて來る。草土手を軽く掠めて土の上に吹き落ちると、其處にも小さな砂塵の龍巻が起つて、五六尺位の土煙の柱が立ち登る。乾草の積み重ねた一角が崩れて、枯れ切つてよれてゐる草が空へ舞ひ上る。今迄で寝て居た犬が、不意に目を醒まして飛び起きて、乾草の跡を追つかけて狂ひまはる。

暖かな目を浴びて、その赤土原の上を人が通つて、一條の路の上を何者にか引かれらるやうに、南から北へ、北から南へ、荷を脊負つた老爺、制服の學生、から車をひいた農夫が通つて行く。人の通つて行く後から土煙が圓ひ小さな柱となつて追掛ける。

風が次第に強く吹き落ちて来る。土煙は次第に四方へ逃げまわる。が、逃げ場がなく、土手へひらみつき周囲の林へ逃げ込み、藪へもぐり、細い徑を傳つて大通りの方へ、人家の軒々を傳つて舞つて行く。面白そうに狂ひ廻つてゐる風は後から強く強く、何者にかに押し出されるやうで、遠く行く赤土の上を大きな手が掻き廻してゐるやうに見える、——どつと音を立て、風は、原のある一點を見當てに、鋭く突きかゝつて来たかと思ふと、地皮を削つて濃く厚く捲き立てるやうに、眞黒な煙が幾丈も高く立ち上つて、ざあつと音立て、四方へ小砂をふりそゞぐ。此黒煙の中に包まれたら最後、眼でも鼻でも只砂塵に埋められて呼吸もつまつてしまふ。重い砂をば四方へまき散らして置いて、薄くなつたその砂塵の柱はくるくゝ廻りながら、草土手の麓に沿つて、その突角を繞つて向うへ見えなくなつてしまふ。

原の上のものは何もかも皆互に戯れ合つてゐるやうだ。風も砂も土も。犬はまた勢よく三つ四つづゝ群れて狂ひ廻つてゐる。騎兵が時々一騎二騎づゝ疾驅して来たかと思ふと、そのまゝまた砂塵に包まれて何處へか姿をかくしてしまふ。

思ふと、そのまゝまた砂塵に包まれて何處へか姿をかくしてしまふ。

午後になると、此戯れが一層烈しくなる。戯れが昂じて強い争ひを引き起す。風と砂とばかりではない。今迄で何處にか隠れてゐた灰色の雲が一面に低く動き出して、柔い物恥ぢするやうな早春の日の光りを覆ひかくす。と、後は荒れ狂ふ怪物のやうに、原一面の土砂が立ち上つて、高く舞ひ登るもの、横さまに疾驅して行くもの、疲れては地に落ち、休んではまた舞ひ上る。遠くの方では雲と砂煙とが合するやうで濛々として果しなく、只一面に薄暗くつづいてゐる。大地は思ふまま、風の前に胸を晒らして、猶一層風が強く吹き落ちたらば、此大地の胸が裂けて恐ろしい響でも立てはしまいかと思はれる。

もう人影も見えない、今迄で狂ひ廻つてゐた犬まで姿を隠くしてしまつた。風と砂とがもつれ合ひ、からみ合ひ、雲が上から押し付けて、何者でもその間には入るものがあるば、揉みに揉まれ、くだくにせられて何處へか吹き飛ばされてしまひそうだ。

日は一度隠れたきりもう祝いても見ない、狂氣じみた土煙の亂舞は日暮近くになるにつれて一層度がまして来る。枳殻藪を境ひの人家は早くから戸を閉じて、此狂亂者の舞ひ込むのを懸命に防いでゐる。それでも隙を求め隙を求めて、如何なる微細な戸隙からでも侵入せずには居ないのだ。

此早春の砂塵の狂亂が次第に度を弱める頃、此赤土原にも處々に淺緑が浮び出て来る。

旅の風景を写した
 旅の風景を写した
 旅の風景を写した

雀

(137) 雀

門の際に銀杏樹が一本、それについで竹が六七本群れて立つて居る。銀杏樹は此間まで眞黄な葉を夕日にきらめかせてゐたが、もうそれもすつかり散り盡くして、今は裸になつた無細工な枝を冷たい空氣の中に伸ばしてゐる。竹の葉もじつとして動かずに、寒さが、葉をひたし幹に喰ひ入つて行くのをそのまゝ、如何様とも手の付けやうがなく、たい立ちすくんでゐる。日は野末に遠く没して、餘光が雲を紅く燃やし、鋼鐵色に次第に黒くなつて来る空の上にも、微かに反射を見せてゐるが、銀杏樹の梢にも竹の葉にも、もうその静かな光りの先きは及ばない。竹の茂みの真中から、次第に闇の色が四方へ廣がりたゞよつて行くやうで、此處の庭が何處よりも暗さの中心であるやうに思はれる。

私は、この風も暫し死んだ夕方の、魔術でもかけられたやうな静さを眺めて窓の所

に立つてゐた。

コツコツ／＼人の足音が塀のそとの小石道の上聞こえて来て、門の近くへ寄つたかと思ふと、ばさばさと、今迄で静かにしてゐた竹の葉の黒みが破れて、何か小さな黒いものが竹の上の方へ飛び上つた。その途端にカラツと門の戸が開いて、用きの小僧らしい者がすん／＼家の裏の方へ廻つて行つた。

私は氣をとめて見た。見ると一羽の雀だ。ばさばさ／＼羽叩きしながら目はよく見えないので、足どまりも危なく、幾度か落ちさうにして其度毎に羽を叩く、チア／＼と悲しさうな聲を擧げる。が、それかといつてまた竹の茂みを他所へ飛び去らうとはしない。チア、チアとまた鳴いてゐる。——今家の裏へ廻つて行つた小僧がまた出て来た。雀は一層羽叩きを大きくして銀杏の梢へ高く舞ひ上つた。小僧は怪訝な様子をして一寸と上を見あげたが、またびたりと門を閉ぢて出て行つてしまつた。もう何方を見ても開は一面に立ちかくして、雀は飛んで行くべき方もない、小頸を

傾け、身を縮めて小さな鳥は銀杏樹の梢にとまつてゐた。私は鳥が如何する事かと、物好きに窓の所を去らずガラスの中から覗いてゐた。寒い空氣は一層寒さを増して、重くるしく、四方からその重みで此一羽の小鳥を押し付けて来るやうな氣がする。寒さと暗らさで、此鳥は動けなくなつたのではあるまいか。朝になつて見たらば門の際に小さな鳥の死骸が白い眼を閉いで落ちてゐるのではあるまいか……

不意にチア、チアと二聲ばかり鳴いたかと思ふとばさ／＼と羽叩きして小さな影は銀杏樹の梢から下へ落ちた。何處へ落ちるかを見ると、毎晩慣れてゐたと見えて、二三度羽叩きをしてゐる中にその姿は竹の茂みの中へかくれて、暫くすると、竹の葉の破るゝ騒ぎも、雀の羽音も鳴き聲も何もなくなつて、まう眞のまつくら間になつてしまつた。

今迄では氣が付かずに居たが、此一羽の雀が毎晩此竹むらへ来て此處を宿りとしてゐるに違ひない。此竹むらを取圍んでゐる無限の間は、一羽の雀を押し潰すやうに四方

から寄せて来るのだが、繊弱い竹の葉がその闇の力を押し返し、鋭い寒さの射し通して来るのを防いで、おだやかな一夜の眠りを此雀に與へてゐるのだ。

私は机の前に坐つたが、まだランプも點けず、そのまゝ闇の中をすかし見て、竹むらの中に宿りをとつてゐる小さな漂浪者の上を思ひやつてゐた。漂浪者だ、唯一羽ぎりの小さな漂浪者だ。と思ふと私は急に物寂しいやうな氣がして来て、自分の身の上かと思ひやられずには居らなかつた。

東京を目當に、國を飛び出して来て、今川小路のある下宿屋に初めて孤獨の生活を味はつたのであつた。その室の前には一本の檜葉の木があつたのを覚えてゐる。大通りからは少し奥深くは入つてゐたので、砂塵は此處までは舞つて来ない、が、それでも風のある日はその唯一本きりの檜葉のゆらく揺れるのでそれと知ることが出来た。朝早く窓の戸を開けて私は、その檜葉に朝日の射してゐるのを見るのが、心を引き立てる一つのてだてになつてゐた。空が曇つて此一本の檜葉に寂しい寒雨が降りそゞぐ、

私は泣きたいやうな心持ちになつて此木を見やつてゐた——唯一本きりの木であつたが、それでも時々まぐれ雀が二三羽づゝ通りの方からやつて来て、チャツチャツと鳴いて、小さな木の上をあちこち飛んでゐることもあつた。そんな時は私は此鳥の幾百の群がどつと羽音を立て、森の木の上へ舞ひあがる遠い田舎のふる郷の景色を思ひやつて、眼の前の寂しさを忘れてゐた。雀は此木を目當てに時々舞つて来ることはあつても、身を隠すだけの葉の茂みがないので宿りに来るやうなことはなかつた。

檜葉の木の寂しい宿から私は牛込へ移つた。それからさきは宿から宿と移りまわつた。窓の前に椿の藪のある家もあつた、友人と一所に植木屋の花園の中に住んでゐたこともあつた。薔薇が一面に籬となり屋根となつて紅い花を咲かし、その棚のさきからつる桔梗の長く垂れ下つてゐる家にも居た。その薔薇棚の下に雨後の潑水が出来て其處へ来て雀がばさばさ水をあびてゐる處もあつた。牛込から小石川、小石川から郊外へ出て、大きな楓の樹の並み立つてゐる雑司谷の森の中にも住んでゐたことがあつ

た。大久保へ移つて来てからも四五軒引き越した。寺の一間に薄暗い長い日を送つたこともある。私は越して行くさきもまたいつか追はれるものと覺悟して定住の地を求めたいやうな、また求めても到底も得られない寂寥の感じを抱いて、幾度び荷を積んだ車の後について行つたか知れなかつた。郊外へ追はるゝやうに出て住むやうになつてからは、随分竹藪や、椿の木に對して室を占めてゐないこともなかつた。が、今日といふ今日まで、私は一羽の小鳥でも、自分の小さな家の構への中に泊りを求めて、安らかに眠つてゐるとは氣が付かなかつた。

建て付の悪い隙間だらけの、冷たい風の洩れて吹き込で来る此の一間が、私の身を入れる暫しの定めの場合のやうに、小鳥に取つては門際の五六本の竹の茂みの葉の陰が彼の甘い眼を求める樂天地になつてゐるのだ。闇が幾重に取り巻いても、寒さが如何に鋭く追つて來ても吾等は此處より外に身のやるべき天地はない。私はそつと音を立てないやうにガラス戸を上げて外面を見た。暫くとだえてゐた風は此時さつさつと吹

き起つて竹の茂みに揺れてゐるが、その黒い影を掻き亂す程強くはない。濃い紺色をした空からは澄み切つた新月の光りが落ちて、微かに庭を照らしてゐる。その光りのさきは竹の葉をも分けて、身を小さく縮めて眠つてゐる小鳥の羽にも忍びよつてゐるのではあるまいか。私は静かな心になつて、一層注意して音させないやうに兩戸を閉ぢ、ガラス戸をもしめた。

霧

坂を一つおりて登ると郊外の村だ。

夏の終からかけて秋の初めになると。平野の上に雲が縦横に亂れる。夏の盛りが砕けて、澄み切つた秋の景色に變る間に、此動亂の時期がある。物を突き破るやうに風が吹く。何か目に見えぬものに取りつかれたやうに雲がもがいて野をはしる。その雲と雲との行ひ違ふ間から時々雨がこぼれて来る。昨日南風が蒸すやうに暑く、雲を追ひふせくして吹き渡つたかと思ふと、今朝は冷たい北風がすうい〜と物の間を縫つて行くやうに吹いて来る。いかにも氣紛れな空合ひだ、郊外の村、平野の上に立つてゐる大久保の村には朝と夕とに霧が濃くかゝつて来る。が、此霧のかゝるのは、時期からいへば、此雲の變亂の少し後だ。

大久保の村は二條の大通りから左右に幾條にも分れて小徑が走つてゐる。そしてそ

の小徑の末に行くまでそれ〜人家が出来てゐる。郊外の村のうちの猶一層の郊外といふかたちをなしてゐる。

霧は平野の上から、まづ此小徑の果ての小家を襲ひ、次第〜に軍を張つて、兩翼を廣げるやうに、濛々として、草原を壓し、林を包み、人家を没して来る時の不思議な姿は、何ともいひやうがない。さあ、さあ霧の端々が木の頂で突きかれ、切り開かれ、切られ、ば切られたまゝ、裂かれ、ば裂かれたまゝで、その傷の個所をつゝんですん〜進んで来る。月がある夜なら、月光をさえぎり、闇の夜ならば一層我もの顔に四邊を傾して、思ふまゝに身を伸ばし縮めてゐる。

表通りの商賣家の軒の燈火はぼんやりして、湯屋でこぼす夜更けての捨て湯の湯氣は、下水の溝から立つと直ぐに廣い霧の圍りの中にとり入れられてしまふ。夜鳴きの鶏の聲を多く耳にするのも斯様な晩だ。圍ひの中までも、庭の奥深くまでも迷ひこんで来る霧の姿に、鶏は曉方の薄明かとまどわされてしまふのだらう。所々霧の中から

時をつぐる聲がする。

私が夏の初から掛けて秋の終りまで間を借りてゐた家は、大久保の本通りから右の原へ出やうとする枝路の中途であつた。市中から引越して来たばかりの初めての郊外生活、附近にも同じ家にも友人がいくらも居るので、すこぶる呑氣な、そして心持だけは至極にぎやかな感じのする、自由な生活であつた。

本通りへの出口の木立の深い垣の中から、百日紅の花が夕日に向つて、匂やかに咲いてゐて、そろ／＼霧が深く立ちこんで、此枝路の中までもまよひ込んで来る頃は、木犀の薫りが高くその木立の中から夜の空氣の中を傳つて来るのであつた。何も知らず闇の中を歩いて来ると、高い香りが不意に鼻をうつ、閃めくやうに種々の思ひが頭の中に浮んで来るが、その下を通り過ぎると、暫くして香りは消えてしまふ、回想の像もまた不意になくなつて、夜氣の冷たさが肌に觸り、氣が付くと、ぼんやりして四周が霧に包まれてゐる。軒燈のまわりを何か不思議な物のかたちが行きめぐつてゐるや

うな氣がする。廣い深い海水の中をくいつて行くやうで、その水の中には様々な流れが漂ふてゐる。木犀の薫りはその流れの一つだ。その流れを通り過ぎると、只ぼつとして、様々なものが音を秘めて、忍んでゐるやうだ。

丁度斯様な霧の深い宵の事であつた。私は重くるしい頭を夜氣に觸たらばと思つて出て見た。室から狭い板壁で圍まれた庭、庭の右の隅に開き戸が付いてあつて、開けると直ぐ路になつてゐる。庭へ出て戸をあけて路へ出た。冷たい空氣に頭は稍々すつきりする。出た時はまだ霧がかゝつて来ず、仰ぐ空に星くすが一面すきまもなく輝いてゐて、銀河が白くざれて、もう寒げな色も見える。

原に出やうと思つて、右に路を曲つて行つた。路のはづれは片側の建家で、その裏には草深い畑がついてゐて、中に飛び／＼に家が出来てゐた。

家の中からはランプの光がさし、その前で、障子を一本開けて、何か話し會つてゐる人の姿が見える。何の氣もなく私は路の上に立ち留まつて、人影の見える家の中を

や、隔つて見てゐた。

何か話しかつてゐる。が、時々力のは入つた大きな聲もする。次第にその聲が高く
なつて来るやうだ。

「よくそんな事が言へた義理だな、一體貴様人間なら、どの面さげて、俺の前へなん
か出られるんだ、え、馬鹿ッ」

「……………」合手の答はない。

と、此度は取りなすやうな中年の女の聲がする。

「まあ、そうお前さんのやうに一刻な事ばかりいつたつて仕方がないぢやないかね、
力さんだつて何もさう好んで来るわけぢやなし、ね、力さん」

「……………」また、合手の聲はしない。

「ふむ、馬鹿にしてらあ、好き好んで来られてたまるものけえ、やれ病氣だ十圓くれ、
餓鬼が生れた、五圓くれ、何てさまだ。北海道くんたりまで行きやがつて、鏝一文に

もなんねえで、やれ女房だ、やれ病氣だ。やれ病氣だ。おいてくんねえ、何人が頼ん
で女房持つて言つた、その様して女房がなんだえ。何處の馬の骨とも別んねえ腐れ
女ちよ、どうしやがつたんだ……………」

「いゝ、もういゝや、頼まねえや、うるせえッ」

今度い若い男の聲だ。

「何にッ」、立ち上りも仕兼ねしい見暮だ、とたんに、何かがつと音がした。と、「ま
あお前さん……………」力さん」と、押えるやうな、たしなめるやうな力を籠めた女の聲だ。

「馬鹿野郎、好い年よしやがつて、何時まで親の脛齧る氣で居るんでね、齧りばえも
しねえ脛じやねえか」

氣抜けしたやうな調子に稍々聲がゆるむ。

「もういゝや、うるせえッ」若い聲がしたかと思ふと、障子の開けてあつた椽側の、
今迄暗くて、此方からは見えなかつた方から、ひよつくり人が出て、二三步畑の方へ

来かゝると。

「まあ力さん」と家の中から女の聲で追ひすがるやうにいふ。

「打捨つてをけ、馬鹿ッ」とおつ付たやうにまた聞こえる。が、その中、かたびしやいつて、路の方へ向つた戸が開いた。さつと光がさすかと思つてゐると、茫つとして、遠くまでとやかない、光影がゆらくとゆれたやうだ。「まあひどい霧」と、いつたが、直ぐ思ひだしたやうに、「力さん」と呼んで見たが、返辭がない。ちらツと、はつびを着た人影らしいものが狭い光の先きを切つたやうだつたが、それきり分らない。

はつと私は氣が付くと、霧だ。今まで見えてゐた家の屋根がぼんやりして、何か遠い島でも見るやうだ。かさツ、かさツと畑の方から人の足音がして私の傍を通りぬけて行つた。私は何の事もなくその後をつけて行つた。何處まで行つても果てしのない海の底を通つて行くやうな氣がする。二三歩先だが、それとも十歩さきだが、人の足音は見當がつかない。只何かに引かれ、何かにうながされて、私とその足音とはある距

離を置いて同じ路を通つて行くやうだ。

不圖頭を上げて見た。もう路の出はづれ、草原の上へ來てゐた。向ふの射撃場の高い草土堤がくつきり太い線を劃して、ピラミッド型に上の方だけ浮いてゐる。その他桐梧の樹、假兵舎などはすべて没して見えない。露ぼい長い草が足にまづはりつく。何の爲めに私は斯様な所まで出て來たか自分ながら解らなくなつた。一寸と立留つて耳を澄すと、遠く草を分けて、ぶすつ、ぶすつといふ音を立て、人の足音がしてゐるかと思ふと、それきり何も聞えなくなつてしまつた。

私は引かへして來た。歸りがけて見當を付けて見ると、畑の中の家はもう戸がしまつたか、光も何も見えない、今迄の事は皆夢の跡のやうだ。仰いで見ても、ぼんやりと光もない星が其方此方に白く浮いてゐるばかりだ。私は開き戸をあけて庭から室へは入つて、急いでランプを付けた、ぱつとして光はいつもより明るく室の隅々まで照らし出すやうな氣がした。

草の實

秋雨のふりつゞく原の上、薄黄に枯れた草の葉はびつしより濡れて、草の間の小徑は大方小流れを立て、南へ北へ流れてゐる。

私は時間が迫つたので、徑の上でも草叢の中でも一向關まはず、向ふばかり見て、殆んど小走りに通つて行つた。

ベルの鳴るのを門際で聞いて、急いで階段をかけ上つて教室へは入ると、ほつとして、額から汗が流れる。汗をふきながら私は名簿を片端から呼んで、腰をおろした。

フレンチ、レポリューションの歴史の輪讀で、學生の可なり流暢な發音となかく巧みな譯語とを聴きながら不圖私は視線をおとした。見ると、泥まぶれになつてゐる長靴の中程に草の實が二つ三つついてゐた。蔓草の實だ、原の上に爬ひまはつてゐる蔓草の實だ。足許も見ずに馳けつて來たのが、いつか知らぬ間に靴に取りついて來たのだ。

だ。

私は妙な氣に打たれた。何物でも自分等の近くへ來たものは自分等の種族傳播の補助とする爲めに、草の實は私の足へまとひついて來たのだ。と思ふと、何だか私は足がむづかゆくなるやうな氣がした。いまにも此實から芽が生えて蔓を伸ばして私の手足にも身體にもまとひついて來るのではあるまいか。

草原の中に行き倒れて、顔の肉、手足の肉もとろとろに溶け落ちて黒い色に變つて來るその上を、紅い莖をして眞白な小さな花をつけた蔓草が、大きなぎだくを刻んだ廣葉を十分に伸ばし、處得顔に、其莖は太り、私の身體の中に思ふまゝに其根を植ゑつけて行くやうな様が、あり／＼見えて來るやうに思はれてたまらない。身が慄へるやうな氣がする。

氣が付くと、もう先刻立つて讀んでゐた一人の學生は譯讀を終へて、全級二十人程の學生は怪訝な顔をして私の方を見てゐた。

驚いて私も椅子をはなれて一回音讀をして譯を付けたのが何だか気が落ちつかない。フレンチ、レポリューションといふやうな事を人は言つてゐるが、此様な革命なんかは植物世界にだつて澤山あるだらう。只吾々が知らないばかりだ。いやそれどころではあるまい。平靜に見えてゐる植物の間にこそ、吾々の知らない一層激しい幾多の食ひ合ひが行はれてゐるのだらう。或科の種族は食ひ亡され、或種のもは盛んに繁榮して行くのだらう。「暗黙の争闘」が激烈に行はれてゐるのだ。

私は不圖友人から聞いた「蔓草類の繁榮期」を思ひだした。さうだ、今こそ我が地球の表面何處へ行つても蔓草と月見草とが繁榮期に向つてゐるのだ。銀杏類のやうな衰亡に向つてゐる植物と、何物の繁殖してゐる土地へでも、また如何様な高山の中腹へでも、谿の中へでも、川原へでも海岸へでも自分等の種子をすんすん運びやつてその繁榮を計つてゐる月見草や蔓草類とを比較して見ると、何とも言ひやうの無い怖ろしい自然の力を感せずには居られない。

「暗黙の戦争」、何物にも打勝つて自分の領土を擴げて行く蔓草、その蔓草の實は私の身體を自分等の發展の媒介に使つたのだ。私はバリの暴民が自由を求めて、野を焼く火の如く、觸るゝものを打ちこはし、遮ぎるものを突破つて、チェイルリー王宮へあばれ込んだ、狂暴の歴史よりも、靴の皮にとりついてゐる一顆の草の實の方がどれだけの力を備へてゐるとも知れないと思つた。

或時、私は、それは冬の夕方の事であつたが、雪はまだ積らない原の上を歩いて行つた事があつた。不圖、以前人の住んでゐたらしい荒れた屋敷跡へ出た。中へは入つて行くと、大きな家の床板も無くなつた室の四方の壁に、一面蔓草が爬ひ廣つてゐた。錆の脚のやうに赤黒い莖が、枯れては居るものゝしつかり壁へくひ入つて、その葉は枯れてかさゝく鳴つてゐた。土臺石から次第に爬ひ上つて、柱でも壁でも、楣でも天井でも、それが一面の壁だけではない。入口を除いて室の中全體に爬ひまはつてゐた。脊に苔の生えた蛇が幾筋かこんがらがつてのたうち廻つてゐるやうであつた。今こそ

枯れて、此遺憾のやうな家の壁を却つて支へてゐるやうなもの、春先き此枯れた莖に水気が走り、芽をふき、葉を伸て來たら、それこそ壁をも貫き、天井も屋敷も貫いて、骸骨のやうな家は蔓草の力の下に倒れてしまふだらうと思つた。私は怖ろしくなつて、此眠つてゐる蛇の群のやうな蔓草をいつまでも見て居られずに、其家の中から走り出した。

聯想から聯想に走る。私は餘程の間黙つて教壇の下のあたりを見つめて居たものと見える、がや／＼いふ學生の聲に氣がついた。空想家だなあと思つながら思つて、氣恥かしくなつて、急いで輪講の順番を進めて行つたが、それでも胸の中で、人間は人間同士で種類争ひをしてゐる間に、それを纏つての周圍では一層恐ろしい争ひが聲を立てずに行はれてゐるのだ、といふやうな事がしきりに思はれてならなかつた。

「セイヌ河畔」

南向きの部屋の障子一面に日が照らしてゐる。狭いガラスを透かして戸外を見ると門際の二本の檜葉の樹が風に少し揺れてゐる。青い空が光るやうにして、白い軽い雲が——早春の微候だが——丸くなつて浮んでゐる。

今あの門の戸が開いて、「Y君」と、其終りの「君」へ力を入れて呼ぶ聲がしたならば如何だらう、瘦せた小柄な身軀に黒綾のインパネスを着て、黒の山高帽を戴いて、少し右肩を曲げるやうにしては入つて來られたら如何だらう。眉のあがつた、眼の涼しい、頬は稍こけて、髭を短かく切つてゐる。何人も取次ぎに出ないので、「オーイ、Y君」と、又同じ調子で、格子戸の外へ立つて呼んで居られたら如何だらう。一人で格子戸を開け、内から縁側へ廻つて、ミシ／＼歩いて障子を明けると内に私が居るので、

「なんだ、君が此處に居るぢやないか」

「いや、失禮しました、つい空想に耽つてゐたもんだから」と惶て、座布團を火鉢を隔て、向ふ側へなほすと、

「失敬」と、インパネスのまゝ、布團の上へ坐はられる。兩手を一寸と火鉢の縁へかけて、「何か書いてゐるの」と言はれる、
「いゝえ」といつて兩手で頭を押えると、

「いけないね、君は怠けて」と、ちよつと、下唇を噛むやうにして、又「はゝゝゝ」と美しい齒なみを見せて笑はれる。其齒なみは私はいつとも美しいと思つた。

少し身を振つて床の間の方を見る。床には、「セイヌ河畔」を寫生した水彩畫の額を掛けてある、暫く凝然と見て居られる、頭髮は薄く頭筋が細く蒼い。

「とう／＼來ちまつたなあ、此額が、君の所へ」と一人で嘆息するやうに言つて、猶額から視察を放しさうにもしない。繪は或畫家が佛蘭西へ留學中に出來た傑作で、此人の愛して居られたのを、私の新居の紀念に贈られたのだ。

「ね、君、Calm and Free 此繪の表はしてゐる調子はこれぢやないか「静穩にして自在なれ」、ウオルツウオルスの詩の眞髓はこれだ、それが、人の家庭だつて、これになくちやいけない、平和ばかりではいけない、やつぱり自在な所が無くつちや、ね、君、……………」

と、言ひかけて、苦しさに咳入られる。咳と顔に充血して來る。いかにも苦しうだ。關まはず語られる。血色が次第に薄くなると、顔は前より一層蒼く、懐しい眼が濕つて、涙が溢れさうに思はれる。

眼を見張つて、心力を集めて聴き入らずには居られない言語だ、句と句に力が籠つて、少し錆を帯んだ調子が聴き手の頭の中へ泌み入らずには居られないのだ。○
man, on nature, on humanity! ……………

私は不圖目を上げて、床の間の額を見た、Calm and Free—セイヌ河の靜かな流れと、其岸を繞つてゐる綠樹の影と、河上遙かの向ふ白い雲と、初夏の曇り日の空で

でもあらうか、薄灰色の空が水の胸にも寫つてゐて河にも森にも空にもしつとりした同じ一つの調子が行き亘つてゐる。此景色の中へ身を入れたらば、何處か、水か雲か森かの中へ吸ひ込まれて了ひさうに思はれる。私は今日初めて此景色が自分の眼の前へ開かれたものゝ如くに眺め入つた、何もかも忘れて、——春の日も、一人家に居る事も、門を開けては入つて來た人を忘れた事も、其人の懐しい面影も、透徹した其人の自然論も——

河に沿うて左岸を微白い道がうねつて走つてゐる。道に沿つて河に臨み、小さな幾つかの窓を見せて煉瓦の家が一つ立つてゐる。此道は森陰に没して、また少し隔つた向ふの方にかすかなうねりとなつて、水際を走つて行く。此道の上を少し俯伏さかげんに歩きながら、初夏の濕氣の多い空気を吸つて、一步一步自分の思ひを頭へ刻み込んで行つた人があるやうな氣がする。——いや確かに有る。悠々として水は何のさわりもなく流れてゐる。森を抱き、岸の青草に手を伸ばし、

肩をあげ、足を動かして岸近かい二三株の杭に迫まつて、見る、が、直ぐ笑つてもとの静かな、何處までも、何日までいも續いて行くやうな、静かな姿に立ち返つて、音もたてずすべつて行く。

幾度び此森の上、水の上、雲の姿に彼の詩人の線視がそゝがれた事であらう。疲れた目を上げて、熱した目を上げて、そして「平穩と自在」とを幾度つぶやいた事であらう。

繪を離れてまた空想に耽つて行きさうになる。面影が目さきへ見えて來さうになる。私は凝然と目を閉ぢて回想の中に浮んで來る其面影を待つてゐた。——一人ぎり居る家の内の静けさ。岸の青草に咽ぶ流の音が響えるやうだ。森の緑葉の戦ぎも聞えるやうだ。其の森の下を通つて行つた人と、此繪を贈つて呉れた人とが同じやうな氣がする。其人は森の中を流れの音を耳にしながら、何處まで何處まで、うつむきながら通つて行つてゐるのであるまいか。

若葉の夜の森

若葉の森の夜は静かな中に賑かさが籠つてゐる。

眩しさうに日に照らされてゐる眞晝の森よりも、夜の森には若葉の自在な囁きがある。人間の官能も、晝は視覚のみ働かちで微妙な自然の樂の音を意味なく聞き流す。蒼黒い空に星のまばらな初夏の夜を若葉の森には入つて行くと、秘かなる悦び、物恥かしさうな、事にふれて曳らす、ついでまやかではあるがもの珍らしい悦びがある。蛙の聲が遠くからしつとりした夜氣の中を傳つて來る。葉のそよぎが其遠くから來る聲と混み合ひませあつて、一層のゆらぎを見せる。蛙の聲は若葉の中に包まれて猶も森の奥深くへ消えこんで行くやうだ。

白樫の葉は稍々澄んだ短い音を立てる。おなじ樫の類でも武蔵野には白樫が多い、こゝんもりした若葉の一團の森があるならば、其中に白樫のまじつてゐないことはない。

夜の森でも此葉のそよぎは重々しく耳につく。

たけ高くのびてゐる榎の樹、椋の樹、樺の樹の高い小枝でゆらいでゐる葉のそよぎはいかにも微かな幽遠な思を抱かせる。にはとこの葉はのび、やつでの葉が羽團扇のやうにゆらぐ。若葉のかをりが何處にも行き亘つてしつとりした氣分になる。

森の出口にひらくひらく氣忙はしさうに搖いてゐる葉の一團がある。白楊の樹だ。此樹の葉くらゐ、くるく目まぐるしくひるがへる葉はない。今にもちぎれて飛んで行きさうだ。そして葉も極めて薄く色も淺緑だ。秋になつて此樹の葉くらゐ黄色になり、此葉くらゐ騒わがしい音を立てるものはない。一體どんな樹の葉でも、多少枝と鋭角をなして葉柄がついてゐるものだが、此樹の葉だけは、葉柄が枝に直角にいついてゐるのちよつとの風にも氣忙しく騒ぎ易い、始終さまよつて小さな目を見張つて沐の番人でもしてゐるやうに、忍ぶやうに寄せて來る風にもすぐ泣いて騒ぎ立てる。白楊の樹の雄花はうす白い色をしてゐるが、雌花は青い。青い此雌花が熟すると蓬

々として煙のやうなうす白い毛をつけて實が飛びだす。其あわたしいと、こゝろみに其實を採つて来て掌の上へのせて見てみると、白い實はみるゝ殻を抜け出して、忙して人の掌の上を脱れて空中に飛び上る。其姿のあわたしいこと、目に見えない何物か、後から追つかけて行くやうだ。幾萬片の此實は蓬々として若葉の森を離れて武藏野の中を縦横に飛び廻る。水に落ちて送られて海岸へ打寄せられるものもある。羽田の海岸などでよく見る白楊の脊低林は此の實から生えてまだ十分に生長しないのだ。迷ひくゞて何處ともなく漂泊する此實の果ては、廣く世界ちうに分布せられるのだ。惶たしい自然のプロセスの一端は此白楊の樹の生涯が能く語つてゐるやうだ。舊時から無意識ではあつたらうが、白楊に戦ぐ秋の悲風に胸をいたためてゐた支那の詩人等は、しらすゝに、此木の惶しい騒ぎに無常迅速を感じてゐたのだ。數多くある落葉樹の中で、恐らく此樹くらゐ氣忙しげなものは他になからう。夜の森の中へは入つてじつとして立つてゐる時、ひらくひらくゆらめいて、瞬

時も小止みない葉があつたらば、すぐそれと氣付くことが出来る。左顧右盼、瞳を閃めかして唇薄く話してゐる若人のやうだ。日が照らないので耻しさもない、彼等は思ふまゝを唇から唇へと傳へてゐるのだ。

夜が次等に更けてくると、さしも賑かな森のざわめきも睡むさうに重さうになつて来る。蛙の聲が半ば夢の中で囁いてゐるやうに思はれて、若葉が上から覆ひかぶさつて、總てが溶けて暗の中に一團となつてしまひさうになる。さしもお喋りの白楊の葉さへ沈黙の底に沈んでしまふ。暗黒と沈黙とに若葉の森はとざゝれてしまふ。

癡
人

癡 人

久し振りで晴れ渡つた秋空を、ふるえるやうな日の光りがすべつて行く。
 大久保から舊甲武線の電車でお茶水まで行く。新宿では山の手線から乗り換へる乗客が込み合つてゐた。見るとプラットホームの腰掛に集つて、電車が着いても急いで乗るでもなし乗らぬでもなし、崩れたやうな形をした一團の人がうよよとしてゐる。
 赤色の軍帽で黒の冬服を着てゐるが、肩章も帯剣もない。唯袖先きに一筋赤く線をまいてあるばかりだ。でも、軍人か知らんと思つてゐると、其中からカーキ色の、これは長い帯剣の柄を握つて、眼鏡をかけた、肩章もある一人の人が歩み出て、電車の踏み臺へ足をかける。と、後から小倉服で、陸軍と丸く大きな赤銅色の徽章をつけた帽子をかぶつた小さな男が二人ついて来て、先きへ出た將校らしい男の腰を、一人は左から一人は右から抱へるやうにして車内へ運び入れた。すると、其後から今迄腰

掛けに身を沈めてゐた者も、腰掛の背後に居たものも、ぐやぐや前へ歩み出した。肩と肩と互に助けるやうに押し合はるもの、二人で一人を背後から押し上げるやうにするもの、大きな眼を開いてゐながら、足で地をすりすり両手を引かれてゐる者脇杖で片脚を連んでゐるもの、眼鏡の中から、並の倍にもなつたやうな光りのない大きな眼を、いまにも流れ出さうに無暗にきよろく動かしてゐるもの、左手をだらりと下げて、右手だけでドアの把手を握つてはゐるが、下げた手を一向上げやうともしないもの、口の歪んだもの、額に大きな皺の寄つたもの、電車の中へ次第には入つて来た。
 日曜日で、それに久振りの天気なので、さらでだに一ぱいにつまつてゐた車内は、釣り草のあいたものもなくなつてしまつた。
 私の前に居た四十許の何處かの商家の主婦らしい女は、早く身をすぼめて「此處へお掛なさい」といつた。

「やあ、ありがたう。」と、脇杖をしてゐた一人の男が腰を卸した。「いゝか、貴様の上へ腰を卸ろすぞ。」といつて、元氣よく眼鏡をかけた片眼の人が其男の前へ重つた。「は、あ馬鹿に重い尻だな。」といひながら、脇杖を立ててゐる男に渡して、先きの男は自分の前の片眼男をかゝへるやうに、また自分の身を前へこゝむやうにした。

「お氣の毒ですね。」と、主婦らしい女はまた言ひ初めた。「招魂社ですね。」と脇杖の男が答へる。

「何處からいらしたんです。」

「巢鴨から来ました。」

「あゝ、さうですか、ほんとにお氣の毒ですね。」………

「貴方々は一體何處の聯隊にゐらつしたんです。」

「さう、方々の者が皆一緒になつてゐるんですからね。全國の者が來てゐるのです。」

「あゝさうですか、私の親戚の者で佐倉の聯隊にゐたものがあるんですがね、やつぱ

り戦争に行つて、脚へ怪我をして今では家に居ますがね。」

「さうですか。」と思入つたやうな調子で答へた。

電車はいつか動き出した。婦人と癡兵とはまだ何か話してゐたやうだつたが、聞えなくなつた。「代々木、代々木と」、車掌と驛夫の單調な聲が車窓の外を走つた。電車がこどつと止まると、立つてゐた癡兵等はよろけるやうにして、顔を見合はせて笑つた。

小高い代々木の停車場の兩側を見おろして、人家の屋根越しにコスモスの花の盛りが見える。牧場の牛の遊んでゐるのが見える。降りる人よりも乗る人の多い停車場だ。――ダリヤの花を澤山、紙で根元をまいたのを持つて若い娘が二人入つて來て、愕いたやうな眼をして、癡兵等の顔を眺めた。

「此眼が見えると好いになあ。」と何と思つたか、入口の窓側に腰を卸してゐた兩眼を廣く開いてはゐるが、只きよとくしてばかりゐる一人の癡兵が聲を擧げた。

娘等は一層愕いて其廢兵の顔を見た。青白く、頬骨の出た顔は、只當てなくきよろく動く眼の爲めに、一層物凄く見えた。娘等はおびえるやうに肩をすぼめて反對の方を向いてしまつた。

「馬鹿、見えない方がいくらか知れない。」と押へつけるやうに、其隣の脇杖の男が言つた。開き盲目の兵士は「へ、く」と、白笑ひを見せた。私は左手をぶらつかせてゐた男の肩越しに、其顔を見たが、ぞつとして身がふるへるやうな気がした。脇杖の男は、右隣の今の男に向つて何かぶつぶつ言つてゐた。電車内が森とするやうに思つた。妙に重苦しい空氣が身の周圍をつむひでゐるやうな気がした。彼等は開かうくとする心の眼を、強て自分等の手で、押へつけ押へつけしてゐるのだ。雷火に打たれて、枝が折れ幹の裂けた林の中の幾本かの木が、其幹の裂け目から、伸び出ようとする若芽を、まだ時折り吹き起る寒い風で、枝と枝と打合つて叩き落してしまふやうな事をしてゐる。これがせめての命かも知れない。若芽が伸びたら、それ

きり落木の幹が倒れてしまふかも知れない。

笛が鳴つて電車は動き出した。今日は電車が妙に遅く、車輪が重く鐵軌を押し付け

るやうで、途中ですれ違ふものゝやうに輕快には走つて行かない。

將校らしい顔の青い長劍の男は、私の前にうしろ向で黙つて一言も言はず立つてゐる。私は不圖此人は物が言へなくなつたではなにか知らと思つた。さうでは無いかしら、折々電車のゆれるまゝ身をかゝめるやうにして、窓から外を見透すやうにしてゐるが、やはり何も言はない。何だか私の身も固くなるやうな気がした。此まゝ何處までも何處までも電車が走つて行つたら、それこそ私の顔も青くなつて、唇を固く結んで物が言へなくなつてしまひはしないだらうか。

千駄ヶ谷、信濃町、電車がトンネルへ入つて電燈が點くと、動搖が稍々烈しくなつた。中心の支へのない人形のやうに、立つてゐる兵士たちはたはいなく揺れてゐる。大きな地震か何かあつて、其時出來た斷層面の罅隙から、斷層の底へころげ落ちた生物

等が、上へ攀ぢ登る望みもなく、高く断層の上を望んで、うやく／＼集つて彼處此處へ運びまはされてゐるやうだ。

四谷から市ヶ谷へ電車が着いた。

「さあ降りるぞ」と、立つてゐる右手だけ利く男が先きへ立つて運轉手臺へ出た。杖をつく者、両手をひかれるもの、乗る時と同じやうにどたどた降りた。黙した將校らしい人は前の順序で最後に車内を出た。

「ほんとにお氣の毒だわね」と、何人に言ふともなく、以前の主婦らしい女は、伸び上るやうにして、窓から外を見た。

電車は急に軽くなつたやうに、急いで走りだした。濠際の櫻の葉が黄ばんで、電車の揺れるので時々散る。

九段だと思はれる方の空から、晝煙火の音が高く聞て來た。

新 緑

家の者は皆外出してしまつた。

私は今日の午後は幼児の番をしながら留守居の役にあたつた。

明るい南向きの室の障子を明け放して、椽先きへ藤の寢椅子を持ち出し、毛布を敷いて、其上へ幼児をのせ、私も傍へ腰をおろした。幼児は凝然としてゐて動かない、瞬きもせずに庭さきを見つめてゐる。

門際の銀杏樹が若葉してキラ／＼／＼風に揺れてゐる。檜の若木も芽をふき、かなめも薄紅く葉がのびる。門つゞき、隣の家のお堀に沿ふて櫻の木が並んでゐて、其木の葉は如何にも心よく爽かな色に茂つてゐる。

風が南から吹き渡ると、若葉が一面に聲を立て、揺れ騒ぐ。椽に近い大きな八角金盤の葉をひるがへして家へ吹き込むと、幼児は風を吸つて、泳ぐやうな様に手足を動か

かす。

す。私は膝の上へ抱きあげた。幼児は一層愉快そうに顔を上むかせ、小さな眼を見張つて、身體じうを動かす。私は又じつと胸へ抱きよせた。兒は一寸と動くのをやめたが、眼はおなじく庭先を見つめてゐる。

ぬくぬくと暖かみが胸をめぐつて来る。柔かな皮膚から、衣服を透して、血が私の胸へ通ふやうな氣がする。私の心は静かになる、兒もまた動かす私の胸へよりかゝるやうにして顔だけ外面へ向けてゐる。

風はまたさらさら、櫻の若葉にわたつて来る。透き通るやうな碧色の空には白い雲が浮んで来る。軽く風の音ばかり、門の外を通る人の足音もない。静かな家の中だ。風は家の隅々まで吹き透して行く。只二人きり、兒と私と、新緑の風につつまれて、世界の中に此二人より外に人が居ないやうな氣がして来る。

兒は黙つてしまつた。

小さな澄んだ眼、柔かな睫毛、先刻から瞬き一つしない。何處を當てといふことも

ないらしいが、凝乎と見入つてゐる。何が其小さな瞳に寫るのだらう、手足を動かすことさへやめて、頭の後部を胸へよせかけてゐる。可愛さうな位静かだ、四邊の静かなのに壓せられて、このまゝ動かすなつてしまひはしないかと思はれる。

暫くして、ぐづくいひだした、軽く口を開いてアー、アー、と泣くでもなく、笑ふでもないが、何か求めるやうな、うつたへるやうな調子で聲を出してゐる、そして兩手をもがもがさせて何か捉むやうな、すがりつく所を求めるやうな風をしてゐる。アー、アー、と哀れっぽい聲だ——乳だ、乳だ。乳を求めるに違いない。私はそつと寝椅子の上へ臥せて、牛乳をあたゝめに火鉢の方へ行つた。兒は泣き聲を高くして兩手をあげ、足を動かしてゐる。ぢれつたそうにアー、アーと続けるやうに泣き聲をからませる。

牛乳が暖まつた。乳嘴を熱湯で洗つて合せてやると、泣き聲もやんで、急いで、吸ひつく、と、全身を動かして吸ひはじめる。みるみる、壺の中の牛乳が減じて行く、殆

んど息もつかずにのんでゐる。

飲み疲れたか、暫くすると、眼をとぢだした。眼をとぢてもまだ口だけは乳嘴を放さない。とぢたまゝで折々吸つてゐる。そつと毛布で包んで、椅子のまゝ揺れないよ

うに室の中へ入れて、音を立てないやうに障子をしめた。午後の日は次第に薄く涼い光は青葉の上をすべつて、庭さきから、椽、椽から障子へ照らしつける。風も吹きたえて、折々青葉を揺ぐばかりだ。

二時間ばかり経つた。

夕の静さと冷たさとは、庭の隅々まで漂つて、薄闇の色は四邊を包んで来た。ア一と兒は一聲泣き出した。何者にか襲はれでもするやうに、不意に聲を擧げた。

急いで傍へ行つて見ると、ア一、ア一としばらく出すやうに泣いてゐる。着てゐた毛布もはねのけて、小さな足で着物を蹴上げて全身を波打たせて泣いてゐる。あはて、抱き上げた、が身を伸ばし、頭をそらせ、腹の底からしばらく出すやうにして聲を揉む。

頸の後方へ手をおいて足のさきを押さえ、胸へ寄せかゝえやうとするが、抱えられな

い。ますくそり返つて火のつくやうに泣く、泣き入つて息もとぎれそうだ。

仕方がないから、両手へ載せて撫すりながら椽から座敷、座敷からまた庭へおりて何とか喘そうとするが、手の下しやうがない。情けなくもなつても来る、暗い家の中にランプを點づる者も居ない。仕方がない、私はどうにでも成るやうになれ、此まゝ泣き入つて息が絶えて了つても仕方がない、自分の親の手の上へ載つて泣いて、泣いて泣き死ぬのが此兒の運命ならそれまでだ。私は自分の身を投げ出した氣になつてしつかり両手で兒を抱えて、暗くなつて来た家の中を歩いてゐた。

二三十分も歩いてゐたらう、どうしたのか泣き聲は次第に弱つて来た。

激浪の鎮つて行くやうに、長く次第く溶けるやうに弱つて来て、アツ、アツと頸を動かして泣きじやくりをついてゐる。軽く背中をさすりながら、静かに椽側へ腰をかけた。薄い夕方の明りで、屈んで顔を覗いて見ると、両頬がうす紅くなつて、眼

尻には涙がたまつてゐるが、今まで烈しく顔の筋肉を動かさず、充血させて、恐ろしい何かの力が全身をかき亂させてゐたのが、不意に抜け出て行つた跡のやうに、たゞ茫乎してゐる。今迄であんな騒ぎをして泣いたのは何人だつたらうかといふやうな顔をしてゐる。

静けさは前にも増して、闇は四方から二人を襲つて取まいて来るやうだ。夕方人の居ない家の中の暗さは、其中で何物かの羽ばたきでもするやうで、後から何か覆かぶさりはないかと、私は思はず兒を抱いて庭へ出て見た。

初夏の夕の空には薄雲がかつて星が寂しくまたゝいてゐる。もう一人位歸つて來るやうなものだ、婆やでも弟でも妻でも。何をしてゐるだらう。

私はまた泣かないうちに乳を暖めて置かうと、椽から室へは入つて、毛布をたゝんで厚く敷いて、兒をそつと其間へおろした。今度は泣きそうにもしない、疲れたか、其まゝ眼を閉ぢるやうにする、小さな枕をさせておいて急いで私はランプを點けた。

闇が退いてランプの光が家じうを照らす、狭いだけに光の届く隅々、家が新らしくなつたやうな氣がする。火鉢の火をかき立て、乳を暖める。乳がごとく少し音を立て、暖つて來る、と、また兒は、アー、アーと泣くでもない笑ふでもないやうな聲を立ててくれた。私は急いで乳を燻へうつして水にひたしておいて行つて見た。

身を少し揉んで、小さな手で袖のまゝ、眼の上の邊をこすりながら、聲を擧げてゐる。別に苦しもうでもない。私はそのまゝにしておいて歸つて乳を持つて來た。生れて五ヶ月だが、生後直ぐから牛乳で育てられてゐるので、覚えてゐるものと見える、乳の燻を見るとき、せがむやうに泣きだす、身を伏して寄りをつて乳嘴を含くませてやつた。ハア、ハアと悦しそうにして急いで吸ふ、その時の悦しそうな様子といつたら無い。二口三口飲んだかと思ふと、アツといふ聲と共に乳を吐き出して、アーと長く引いて泣き入つて了つた、何事が起つたのだらう、私は狼狽して手を脊中へ廻して抱き上げ、た、が、もう遅い、だら／＼乳を吐いて咽び入る、涙が頬に傳はる。足を踏張つて、

そのまゝ下へ落しても地から弾力で撥ね上りそうだと。私ははつと気がついて、左手で
 兒を抱えて、右手の指で乳の壘にさわつて見た。熱い、確かに熱いやうに思ふ。耐ら
 ずなつた。熱乳を飲ませたのだ、口も咽喉も燃け焦れて苦しさに耐らず吐き出した乳
 に違ひない、涙も湧いて来る、胸の動氣も高まつて来る。私は只夢中で兒を抱えて家
 の中を歩き廻つてゐた。

と、不意に門の戸が開いて何人か飛び込んで来た。走つて表から駆け上る、見ると
 兒の母親が歸つて来た、「オ、オ、可愛そうに」といひながら、いきなり私の手から
 兒を抱き取つた、と、そのはづみか、兒は泣き止んだ、忘れものでもしたやうに出し
 抜けにやんでしまつた。「オ、オ、好いわく」と母親は頬を寄せて小聲で、如何にも
 いとさうに、肩をすぼめながら、両手でしつかり抱きすくめて言つてゐる。

「は、あ、横着だな、母親が戀しかつたんだ、馬鹿くしい、おれはまた熱い乳を
 飲ませた故かと思つた、が、まあ好かつた」と私は言つた、胸をなせおろした、母親

は、兒を抱きながら曲り椽の端を曲つて、向ふの端まで行つた、と思ふと、アールとま
 た高い聲で泣きだした。私はまたはつと思ふと動氣が前より一層高くなつた。母親も
 氣を打れたと見えて急に立ち止つた、もう又手のつけやうが無い、忘れたものを思ひ出
 したのだ、前よりは一層烈しい。目に見えないが、強い鐵の線金か何か、身體じう
 を伸び縮みさせてゐるやうだ。踏んぞり返つて泣き入るかと思ふと、身體を一まるめ
 にして、キーンと苦しげに、息もつまるやうだ。何が押えたつて、如何な力で押えたつ
 て撥ね返して了ひそうだと。一つの魂その物が全力を擧げて動いてゐるやうに思はれる。
 抱いてゐる母親までも泣きそうに見えてゐたが、手早く羽織をぬいで、自分の脊に負
 つて、毛布をかけて、醫者へ行くといつて、門を開けて出て行つた。

私は茫乎して、椽の柱へ身を倚せて立つてゐた。泣き聲はアール、アールと闇の中を傳
 つて来る。庭先の櫻の若木にはさつくと風が渡る。私は總ての物音がブルブルと胸の
 どん底まで響いて、身體じうの神経がピリピリと動く、耐らずなつて私は眼をとち、胸

を押えて、椽側へ腰をおろしてしまつた。

汽車の響

郊外の夜の寂寥を破つて、時々人に何か警告を與へるやうに響き渡るものは、武蔵野を走る汽車の音だ。

初めて移り住んで来た人にとつては、地をといろかせ林をふるはせて行く此響は、いつも耳について如何にも忙しげな騒がしい思がして、氣が落ち着かないかも知れない。晝夜新宿驛を通過する列車の數は幾百車といふ多くださうだ。それが都から遙々出て行くもの、遠くは入つて来るもの、遠く近く間を置いて、静寂な空氣の中を織るやうに響き渡る。馴れてゐる耳にも、妙に際立つて、けたましく聞こえて来ることがある。それが二三日忘れたやうに何の物音もなく、汽車などは通るか通らないか、そんな事は毛頭氣が付かず、何の響も耳にしない事がある。と、夜更けに一人で机に向つてゐる時、蟲の聲が不圖耳には入る。遠く々次第に近よつて来る汽車の響がま

た耳には入つて来る。

紫紺の空は果しなくつき、ぬか星が無数に燦爛と輝いてゐる。夜更けては、窓から見る近くの栗の樹林の黒い影も少しも動かず、キリッキリ、キリッキリと鋭い細い銀の糸をたゞいてゐるやうな虫の聲が隣の空地から聞こえて来るばかり、少し先きまで隙子が明るく、話聲が折々微かにしてゐた空地の向ふの家も戸を閉ぢてしまつて、空地を繞つて立つてゐる杉の若い生垣が晝間よりは急にたけが高くなつて、何人か人がすく／＼肩を並らべて立つてゐるやうに見えてゐる。星の空を見ても、空地の上を見ても、黒い冷たい夜氣がみち渡つてゐて、その暗い闇の中へ心は溶け入つてしまひさうになる。

と、此時、此静寂な夜氣を破つて、物音が傳つて来る。黒い夜の空氣が如何にも高く波動を起して、森に打當り、草原を打ち、人の家の透き間透き間に入り込んで来るやうな氣がする。近くの雑木林と草山との間を夜汽車は轟然に走つて行くのだ。巨人

の眼のやうな赤い光りを前と後とに輝かせて、黒い長い一列が他所目もふらず走つて行くのだらう。目をふさいでその姿を思つて見ると、遠く／＼なつて行くその響は、次第に微かになるにつれて一種の心持のよい樂の音のやうになつて、紫紺の空に反響を興へ、かすかな星の光に照らされながら、空と草原と接する一線の中へ馳け入つて行く小さな後影が見えるやうな氣がする。

月のない秋の夜の草原を走る汽車の響は、妙に澄んで、諧調の樂しい音を野に傳へ人の胸にしみこませる。私はこの響を聞きながら坐つてゐると、いつも目の前に浮んで来る人影がある。

しつかり結んだ唇、細い目、むつくり肥つた丸い顔の雨頬の肉ははち切れる位に張つてゐる。頭髮は稍々縮れを帯んでからみつくやうに生えてゐる。歩くに少し腰を曲めるが、頭はいつも高く上げて、手を振つて歩いて行く少年の姿だ。

彼は身體も強壯で、頭腦も明敏な方であつた。両親もあり、資産もあり、自分の望

んでゐた學問を修める事も出来る順序になつてゐた。戀愛といふやうな問題に觸れるにはまだ年が若すぎる、——順境に立つもの、仲やかな心持は彼は遺憾なく備へてゐたと思はれる。

それが不圖して家に居なくなつてしまつた。秋の夜だ、星の多い風の冷たい夜だつたさうな。家を出たきり歸つて来ない。先輩を見ても、自分の知つてゐる小數の人々を見ても、皆馳け足をして競争してゐるではないか、何故最少しゆるく歩けないだらう、何故最少し止つて休息が出来ないだらう、ランニングレースの埒外へ暫し出で馳け足して苦しがつてゐる手合ひをやりすごして見るのも面白いではないか……」

夜陰の野を走る汽車の響を耳にしてゐると、不圖、此少年の姿が目に見えて来る。星數の多い秋の夜天の下を、草原をふんで此少年は通つて行つた事だらう。私の胸にその面影が浮んで来るくらゐならば、一層近親い人々の胸にはどんな響を立て、汽車は走つて行くことだらう。

あがき、もがいて呼吸を切りながら走つて行く姿は自分ながら醜く思はない事はない、その渦中に投じない少年の濁らない眼には、どんなに醜く寫つた事だらう。傍にばかり氣を配つて、弱い力であせりあせる形は惨しい、あさましい、刺戟がなければ動かない、動けば苦しさに身を慄はせてゐる。目に見えぬ敵に氣をいらだせ、自分で自分の身を喰ふやうな事としてゐる、——呼吸の切れさうな此馳足の埒外に脱して、彼は何處へか飛んで行つてしまつたのだ。

夜が次第に更けて来る武藏野の中を、汽車は南に北に闇を縫て走つて行く。その響の傳つて行くくまぐま、様々な思を人の胸に引起させる事であらう、此響に引よせられて、闇の夜の草原を思ひ定めた心でさまよつてゐる者があるに違ひない。

機關車の鐵軌に觸れる度毎に、カン、カン、と澄んだ響が、細く鋭く聞こえて来る。此音のする列車としない列車とがある。夜深く、特に寒い冬の夜などに、一人で凝乎と此高く澄んだ、鍛冶屋の鍛錬場から聞こえて来るやうな、その一層長く